

マダガスカル研究懇談会ニュースレター

SERASERA53

2025.11.10発行



表紙の写真

セガ演奏者チ・フレルの像

モーリシャスの歴史は、入植の歴史である。その点ではアメリカ合衆国と似ているが、合衆国に較べると国土面積も人口規模も小さく、建国のドラマに彩りが少ないことは否めない。とはいえ、政治的なヒーローに乏しいことは、文化的なヒーローに脚光が当たりやすいことを意味する。20世紀を通じて活躍したアルフォンス・ラヴァトン Alphonse Ravaton（通称チ・フレル Ti Frère）は、モーリシャスで初めてレコード（45 tours）を発売したアーティストとして知られる。その力強い声は、ユネスコ無形文化遺産のサイトでも紹介されている

（<https://ich.unesco.org/en/RL/traditional-mauritian-sega-01003>、2025年10月29日閲覧）。

撮影年：2023年

撮影場所：Mauritius 国 Port Louis 市内

撮影者：飯田卓

目次

表紙の写真 セガ演奏者チ・フレルの像	1
第 28 回懇談会（大会）	
第 28 回総会報告	3
講演 1 マダガスカルのカメレオンにみられるオス間闘争様式の種間多様性	5
講演 2 マダガスカルとモーリシャスの無形文化遺産	11
生きもの図鑑 32 マダガスカルスナガエル	15
Moi et Madagascar vol.32	18
Voandalana（土産話）44 ツイリーツイ	19
マダガスカル北西部で栽培されるマンゴー多様性の世界	27
深澤秀夫先生のこと	37
深澤秀夫さんを想う	38
マダガスカル研究懇談会会則	41
第 29 回懇談会（大会）のご案内	46
原稿を募集しています	48
2024 年度世話役・事務局・編集部・会計監事	50
奥付	50

第 28 回 総会報告

2025 年 3 月 29 日（土）、第 28 回マダガスカル研究懇談会が京都大学稻盛財団記念館 3 階大会議室で開催され、現地参加 34 名（うち会員 24 名）およびオンライン大会参加 7 名（うち会員 5 名）の合計 41 名が参加しました。研究発表に引き続いて行われた総会には 29 名（うちオンライン 5 名）が参加し、以下の事項についての報告と審議がありました。

	現地	オンライン
大会	34	7
総会（=参加した会員数）	24	5

【2025 年度の世話役の選出】

2024 年度は世話役・世話役代表・会計幹事の任期が終了する年度であり（懇談会の会計年度は 1 月～12 月）、会則に則って総会で世話役を再任するかを審議しました。審議の結果、2024 年度の世話役 10 人の再任が採決されました。さらに、世話役代表・会計監事は世話役会での互選で選出されます。世話役代表は水田拓氏が再任（二期目）、会計監事は杉本星子氏と平野智巳氏が再任となったことが報告されました。

【2024 年度の活動】

2024 年度の懇談会（第 27 回大会）は、2023 年 3 月 30 日（土）に東京農業大学「食と農」の博物館で開催され、32 名（うち会員 23 名）が参加しました。総会出席者は 23 名でした。

『マダガスカル研究懇談会ニュースレター SERASERA』は、50 号と 51 号の編集を行い、電子媒体で発行しました。

2024 年 12 月 31 日の時点での会員数は 154 名でした（前年度から 11 名の増加）。

【2024 年度の決算報告】

収入は、第 27 回大会参加費が 23,000 円（1,000 円×23 名）、前期繰越金にかかる利息 135 円、第 27 回大会の懇親会余剰分の寄付 17,523 円の計 40,658 円でした。これに対し支出は、ホームページ運営費としてドメイン使用料 1,994 円とサーバー使用料 5,016 円、交通費 75,578 円（発表者 3 名および大会補佐事務局員 3 名）、振込手数料 320 円で、合計は 82,908 円でした。この結果、当期收支は 44,908 円の支出超過となり、次年度への繰越金は、2023 年度の 1,075,831 円から、1,033,581 円に減少しました。

この収支決算は、2024 年度会計監事の杉本星子氏と平野智巳氏から「適正」との監査を受けました。これらの報告を受け、2024 年度の決算報告が総会で承認されました。

【2025 年度の予算案】

提出された 2024 年度予算案の収入合計は、前年度繰越金 1,033,581 円です。会費収入の見込みはなく、また 2025 年度大会では現地参加およびオンライン参加の参加費を徴収しません。

一方、各支出費目は、消耗品代 2,000 円（使用の見込みはないが前年度予算案を踏襲）、ドメイン使

用料 1,994 円、サーバー使用料 5,016 円、大会時の懇親会費補助金 20,000 円、交通費 0 円（2025 年大会は発表者も事務局員も大会会場（京都）周辺在住のため交通費は不要）、振込手数料 1,000 円の合計 30,010 円となります。この予算案は総会で承認されました。

【マダガスカル研究懇談会の今後についての議論】

ここ数年継続している懇談会の今後の在り方について、事務局を担う人が少なくなってきており、一部の人に負担を強いている状態改善の必要があり、意見を募っています。総会でも会員の皆様からの意見を募りましたが、会場の参加者から意見は出ませんでした。世話役および事務局で今後の在り方について検討するため、アンケートを作成し、QR コードの表示によって回答を募集しました。

【懇談会大会および懇親会での名札について】

会場の会員より、大会及び懇親会での交流を活性化するために名札をつけることに関して提案がありました。協議の結果、事務局の負担を増やさずに名札を作成するために、養生テープに参加者自身が氏名やプロフィールを記入し、胸に貼り付ける方法が提案されました。総会後の懇親会でこの方法が実施されました。

【次回の懇談会大会の予定】

次回大会は、2026 年 3 月 28 日（土）に東京農業大学「食と農」の博物館もしくは逗子の市民交流センターなどで開催される案を世話役会で検討されていることが報告されました。

マダガスカルのカメレオンにみられる オス間闘争様式の種間多様性

城野哲平（京都大学）

1. はじめに

本来、第28回懇談会発表1「マダガスカルのカメレオンにみられるオス間闘争様式の種間多様性」で講演した内容をまとめて紹介すべきところだが、諸事情により論文の出版が遅れている。そのため本稿では、講演前半の内容にあたるカメレオン科について分かっていることを紹介するとともに、私自身の研究の背景として、先行研究でこれまでに調べられてきたカメレオン科の種内コミュニケーションについて、オス間闘争を中心に概観したい。

2. カメレオン科

カメレオン科は昼行性トカゲの1群で、系統的には爬虫綱の有鱗目（ヘビとトカゲを合わせたグループ）に含まれている。ペットとして知られるグリーンイグアナを含むイグアナ科や、沖縄に生息しているキノボリトカゲ類を含むアガマ科などに近縁である。現生種としては234種が知られており、本科に属する12属のうち、マダガスカルに生息しているのは、地表性のヒメカメレオン属(*Brookesia*)とクチボソヒメカメレオン属(*Palleon*)、樹上性のカルンマカメレオン属(*Calumma*)およびフサエカメレオン属(*Furcifer*)の4属である。フサエカメレオン属24種のうち2種はコモロ諸島に分布するが、他のフサエカメレオン属および、ヒメカメレオン属32種とクチボソヒメカメレオン属2種、カルンマカメレオン属42種のすべての種はマダガスカル固有である。カメレオン科のうちおよそ42%もの種がマダガスカルのみに分布していることになり、マダガスカルは最もカメレオンの多様性が高い地域と言つていいだろう。

カメレオン科の現在の（在来の）分布はヨーロッパ南部からアフリカ大陸、マダガスカル、セイシェル、ソコトラ島、中東、インド、スリランカにまで及んでいるが、多くの種はアフリカ大陸かマダガスカルに生息している。カメレオン科の起源はアフリカにあり、9,000万年前ごろアフリカ大陸で誕生し、その後、始新世（約6,500万年前）と漸新世（約4,700万年前）の2度にわたってマダガスカルへの海洋分散が起こったと推定されている（Tolley et al., 2013; Scherz et al., 2022）。とはいえ逆に、カメレオンが分化したのはマダガスカルであり、後にアフリカに分散したと推定している報告もあり（Raxworthy et al., 2002; Scherz et al., 2022）、カメレオンの起源については明確な決着がついたとはまだ言い難い。

近縁のトカゲ類に比べても、カメレオン科にしかみられないような多くのユニークな特徴をもち、変化する体色、360度見渡せる眼、「第5の足」としてはたらく尾、長く伸びる舌などがよく知られている。眼はカメレオンの感覚器官の中でも最も発達しており、対して嗅覚や聴覚については他のトカ

グ類に比べてあまり鋭敏ではない (Herrel, 2014)。大きな眼球が顔面から飛び出しており、瞳孔以外の部分を眼の強膜と融合した皮膚が覆っている。眼球は左右独立に動かせるとともに、水平方向に 180 度、垂直方向に 90 度という驚異的な可動範囲を示し、両目で約 360 度の視野を確保している。移動しながら餌を探している時は、それぞれの眼球を自由自在に動かしているが、昆虫を見つけて舌を伸ばす直前には両目を獲物に向けており、より正確に対象との距離を測っていると考えられる。ユニークな舌もよく知られた特徴の一つで、カメレオンの舌は加速筋と収縮筋が取り巻いた棒状の舌骨と、その先端に付着した粘着性のある舌先で構成されている (Herrel, 2014)。普段、収縮筋はアコーディオンの蛇腹のように折り畳まれているが、舌を打ち出す時はまず加速筋が中心にある舌骨を締めつけるように収縮する。収縮することで加速筋は舌骨の長軸に沿って広がろうとするが、舌の根元側には折り畳まれた収縮筋があるため、加速筋は舌の先端方向に伸びることになる。加速筋が舌骨先端まで届くと、加速筋の締めつける力は舌骨を喉側に押す力に変化し、加速筋はこの力の反作用を受けて前方に飛び出す。この加速筋が収縮する力と、折り畳まれた収縮筋が一気に伸びる力によって、舌は高速で飛び出していく。尾は移動の際に役立っており、他の一部のトカゲ類のように自ら切ることはない。樹上性のカメレオンは一般的に体長と同程度の長さの尾をもっており、枝から枝に移る時にこの尾を元の枝に巻き付けて体を支えつつ、次の枝に前足を伸ばすような動きをしており、さらに細い枝で体を安定させるためにも尾が重要な役割を果たしている (Herrel, 2014)。対して地表性のヒメカメレオン属の尾はかなり短く、尾の先が下に向けて少し曲がっている。この曲がった尾の先を杖のように使い、数歩毎に尾を地面につけることで姿勢を安定させたまま歩くことができる (Boistel et al., 2010)。

変幻自在なさまや、態度をコロコロ変える様子を「カメレオン」と表現するように、カメレオンの一瞬で体色を大きく変化させる性質は非常によく知られている。このような体色の変化は、皮膚にある色素胞の中にある、色素を含んだ細胞小器官が移動することによって生じる (Herrel, 2014)。例えば、黒色色素を含む運動性小胞が凝集したり分散したりすると、体色が白っぽくなったり黒っぽくなったりする。黒色色素の分散度合によっては、虹色色素を遮る一方で黄色色素の反射は遮られない場合があり、そうすると体色がより黄色や赤色っぽく見える。さらに虹色色素を発色するグアニン結晶の小板の間隔が変わることによって、青みの強さが変化する。このような体色変化は体温の調節や目立たなくして捕食者から隠れるのに役立つか、オス間闘争や求愛などの種内コミュニケーションにも用いられることが分かってきている。体色は雌雄で大きく異なることが一般的で、一般にオスの方が派手な体色をもつことが多いものの、メスもオスとは異なった色彩の派手な体色をもつ種も多い(図 1)。

カメレオンには体色変化以外にも、様々な外部形態上の性的二型が発達しており、種内コミュニケーションに用いられていることが示唆されている。性的二型とは雌雄間にみられる形態の違いのこととで、多くの場合は、生殖機能に関係しない部分の形態の性差をさす。カメレオンでは、クレストと呼ばれる背側皮膚のたくさんの突起や、カスクと呼ばれる頭頂の盛り上がり、そして角のような吻端に伸びる頭蓋突起などがオスでより大きく発達している (Nečas, 2004; 図 2)。特に頭蓋突起は種間で非常に多様化しており、例えばミツヅノカメレオン属 (*Trioceros*) では、頭蓋突起は環状の薄いケラチン層によって覆われた骨でできており、まさに鬼の角のようにみえる。このような頭蓋突起は、真角または環状角と呼ばれる。鱗に覆われた皮膚によって覆われた骨でできた頭蓋突起をもつ種もあり、これを偽角と呼ぶ。多くの種では偽角は左右に 2 本備わるが、中央で癒合して 1 本になっていること

もある。さらに、骨が備わっておらず鱗に覆われた皮膚のみからなる頭蓋突起もあり、これは軟角あるいは真皮角と呼ばれる。カルンマカメレオン属などにみられるこの軟角は、触れると簡単に曲がってしまうほど柔らかい。さらに偽角と軟角の中間的な構造、すなわち基部のみ骨を備えた構造をとる半軟角と呼ばれる頭蓋突起も知られ、その先端部の柔らかさは種によってさまざまである。フサエカメレオン属に備わる頭蓋突起は、偽角あるいは半軟角である。このように非常に多様な構造の頭蓋突起をもつことがカメレオンの特徴だが、私たちは角と言えば闘争に使われる武器といったイメージを抱きがちだ。それでは、これらの頭蓋突起は、すべて武器として用いられているのだろうか？

3. 性的二型と種内コミュニケーション

カメレオンの体色や頭蓋突起のような性的二型は、繁殖にかかる性選択によって進化する。特に武器として用いられる形質は、シカの角のように、オス同士で配偶者をめぐって争うために進化したと考えられることが一般的である。実際多くの動物で、メスとの交尾の機会をめぐりオス同士が争うことが知られており、闘争に勝つことは交尾相手の獲得につながる。オス間闘争はそのオスの繁殖が成功し、子孫を残していくかどうかに対し、直接的かつ大きな影響を及ぼすことから、闘争の勝敗を決める形質には強い選択圧がかかると考えられる。闘争の決着は、直接攻撃し合ってつけることもあるが、直接攻撃は負傷や死の危険を伴う、互いにリスクの高い行為である。そのため多くの動物では、オス間闘争が互いに深く傷つけあうような直接攻撃にエスカレートすることはそれほど頻繁ではなく、特定のルールに則り勝敗を決める儀式化された闘争のかたちをとることが多い。例えば、アカシカのオスはお互いに大きな吠え声をあげ、寄り添ったまま並行に歩く儀式的闘争を行う。吠え声は闘争能力の指標となり、より低い声のオスが勝つ。この吠え声のような形質は、その個体の闘争能力を示す指標として機能しているわけだ。実際、カメレオンでもオス間闘争に体色などの性的二型形質が用いられていることが報告されている。西アフリカのグラシリスカメレオン (*Chamaeleo gracilis*) のオスは、他オスと遭遇するとはじめに体色が一様に薄くなり、その後体側にある斑点が濃くなる (Bustard, 1967)。アフリカ南部のハチノスカメレオン属 (*Bradypodion*) の多くの種は体色が濃く変化し、コントラストの強い色パターンになる (Stuart-Fox and Moussalli, 2007)。例えば、トランスバールドワーフカメレオン (*B. transvaalense*) では、黒地にオレンジのラインが入った体色に変化する。ナイスナドワーフカメレオン (*B. damaranum*) では、緑と紫外線を含んだ青緑色が組み合わされた体色をしており、ヒトの眼には地味に見えるが、これらの色の組み合わせは、紫外線を見ることができるカメレオンにとっては、非常にコントラストが強く見えることが示唆されている (Stuart-Fox and Moussalli, 2007)。一般にカメレオンは、オス間闘争中や闘争に勝った時はコントラストの強い体色パターンを示す一方、闘争に負けた場合はコントラストのほとんどない一様で地味な体色に変化することが多い。

カメレオンのオス同士の儀式的闘争は一般的に、お互いに対して側面を向け合いながら接近することで開始される。接近の際には縦に平たくなることで側面から見たサイズを大きくする威嚇ディスプレイを伴い、さらに手刀を切るように前肢の一方を曲げて下顎の下に付け、残りの四肢をぴんと伸ばし、尾を丸めた姿勢でゆっくりと接近する（図2）。頭蓋突起多くの場合で側面から見たサイズをより大きく見せるような縦に扁平な構造をとっており、儀式的闘争に役立っているのではないかと考えられる。多くの種では、これに加えて頭部を上下に振るディスプレイを示すものの、フサエカメレオ

ン属のラボードカメレオン (*F. labordi*) とボタンカメレオン (*F. verrucosus*) のオス間闘争では頭を振るディスプレイは用いられず、求愛の時のみにみられることが報告されている (Karsten et al., 2009)。ディスプレイを示しながら接近する間に闘争の決着がついた場合、一方のオスはコントラストの弱い地味な体色に変化し、体を萎ませて相手の前から退却する。この段階で決着がつかなかった場合、オス同士はさらに接近してついには突進し、咬み付き合いの直接攻撃にエスカレートすることがある。ミツヅノカメレオン属のジャクソンカメレオン (*T. jacksonii*) では、3 本の真角を突き合わせて互いに押し合い、明らかに頭蓋突起を武器として用いる闘争行動を示す (Stuart-Fox, 2014)。場合によっては、相手の角で突き刺されることによって負傷することもあるという。それに対して、偽角をもつラボードカメレオンでは、頭蓋突起は闘争の武器としては全く用いられず、直接攻撃にエスカレートする場合でも突進や咬み付き合いに終始し、角を突き合わせるようなことはない (Karsten et al., 2009)。このように頭蓋突起を武器として用いるかどうかは種によって異なることが明らかになりつつあり、頭蓋突起の闘争における役割の違いが、その構造の違いを多様化させたのかもしれない。ケープドワーフカメレオンのオスは派手なピンク色の斑紋を胴体にもち、頭部のカスクと呼ばれる盛り上がりが大きい。これらの形質はもちろん武器として用いられるわけではないが、より闘争に強いオスほど、より派手な斑紋と大きいカスクをもつことが分かっており、アカシカの吠え声のようにそのオスの闘争能力を示す指標として機能していると考えられる (Stuart-Fox and Moussalli, 2007)。武器として用いられない真角以外の頭蓋突起についても、あらかじめ闘争能力を伝えることで、直接攻撃にエスカレートすることなしに勝敗を決める指標として機能しているのかもしれない。

先述の通り、マダガスカルに分布する樹上性カメレオンはフサエカメレオン属とカルンマカメレオン属の 2 属で、真角をもつ種は全くおらず、偽角や半軟角、軟角といった頭蓋突起をもつ種もいれば、全く頭蓋突起をもたない種もいる。頭蓋突起をもち、オス間闘争の詳細が報告されているマダガスカルのカメレオンは、今のところラボードカメレオンのみである。この興味深い頭蓋突起の種間多様性が進化した理由について明らかにするには、オス間闘争様式を多くの種で調べ、各タイプの頭蓋突起が闘争においてどのように用いられているかについて比較することが有効だろう。講演当日は、私が進めてきたカメレオンのオス間闘争に関する研究内容について、頭蓋突起にみられる種間差の進化要因に関する仮説を含めて紹介した。論文が出版されたら、改めて皆さんにお伝えしたい。

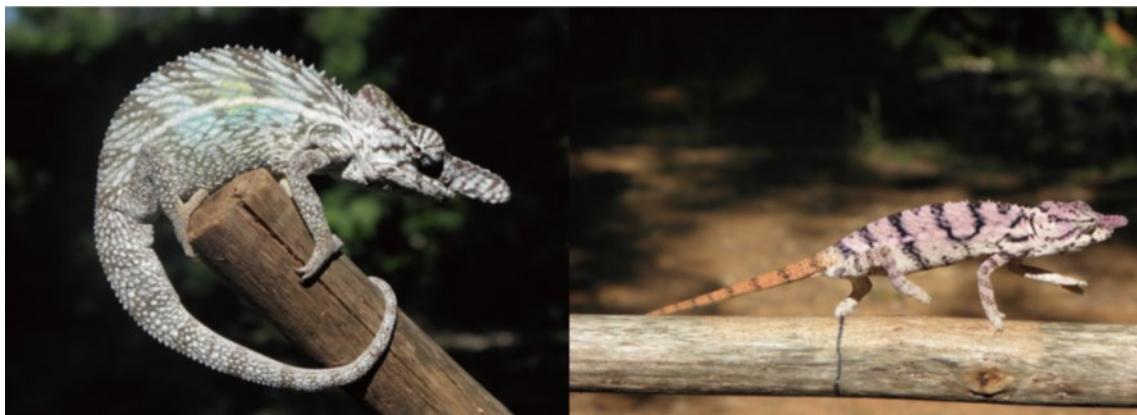


図1. ハナツノカメレオン (*Furcifer rhinoceratus*) にみられる性的二型（ともに、威嚇などのために派手に体色を変えている状態）

オス（左）は緑地にグレーの横縞が入り、胴の中央に白いラインが入る体色を示す。対してメス（右）は、ピンク地に黒っぽい横縞が入り、尾はオレンジ色を示す。



図2. マダガスカルに生息するカメレオンのオスにみられる頭蓋突起の種間多様性

ボエットゲルカメレオン (*Calumma boettgeri*; 左上) は軟角をもち、ラボードカメレオン (*Furcifer labordi*; 左下) は偽角をもつ。ボタンカメレオン (*F. verrucosus*; 右上) とウスタレカメレオン (*F. oustaleti*; 右下) は頭蓋突起をもたない。ウスタレカメレオンは、縦に平たくなり、前肢の一方を曲げて下顎の下に付ける威嚇ディスプレイを行っている。

引用文献

- Bustard, H. R. (1967) The comparative behavior of chameleons: Fight behavior in *Chamaeleo gracilis* Hallowell. *Herpetologica* 23: 44–50.
- Boistel, R., Herrel, A., Daghfous, G., Libourel, P-A., Boller, E., Tafforeau, P., & Bels, V. (2010) Assisted walking in Malagasy dwarf chameleons. *Biology Letters* 6: 740–743.

- Herrel, A. (2014) Chameleon physiology. In: Tolley, K.A., Herrel, A. (eds.) *The Biology of Chameleons*. University of California Press. pp 57–62.
- Karsten, K. B., Andriamandimbiarisoa, L. N., Fox, S. F., & Raxworthy, C. J. (2009) Social behavior of two species of chameleons in Madagascar: Insights into sexual selection. *Herpetologica* 65: 54–69.
- Nečas, P. (2004) *Chameleons: Nature's Hidden Jewels*, 2nd ed. Chimaira Buchhandelsgesellschaft mbH.
- Raxworthy, C. J., Forstner, M. R. J., Nussbaum, R. A. (2002) Chameleon radiation by oceanic dispersal. *Nature* 415: 784–787.
- Scherz, M. D., Protzel, D., Randrianantoandro, J. C., Rakotomalala, D., Karsten, K. B., & Raxowrthy, C. J. (2022) Chamaeleonidae, Chameleons, Tanalahy, Sakorikita. Tarondro. In: Goodman, S. M. (ed.) *The New Natural History of Madagascar Volume 2*. Princeton University Press. pp 1506–1516.
- Stuart-Fox, D. (2014) Chameleon behavior and color change. In: Tolley, K. A., & Herrel, A. (eds.) *The Biology of Chameleons*. University of California Press. pp 115–150.
- Stuart-fox, D., Moussalli, A. (2007) Sex-specific ecomorphological variation and the evolution of sexual dimorphism in dwarf chameleons (*Bradypodion* spp.). *Journal of Evolutionary Biology* 20: 1073–1081.
DOI: 10.1111/j.1420-9101.2007.01295.x
- Tolley, K. A., Townsend, T. M., Vences, M. (2013) Large-scale phylogeny of chameleons suggests African origins and rapid Eocene radiation. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences* 280 (1759): 20130184.

マダガスカルとモーリシャスの無形文化遺産

文化はどこへ向かうのか

飯田卓（国立民族学博物館）

1. マダガスカルの文化・無形文化遺産

発表者はこれまで、マダガスカルではトゥリアラ州南西地域圏 Région d'Atsimo-Andrefana のヴェズ Vezo の人びとと、フィアナランツア州アムルニ・マニア地域圏 Région d'Amoron'i Mania のザフィマニリ Zafimaniry の人びとのあいだで調査をおこなってきた。前者は南西海岸部に、後者は中央高地部に位置する。もともとは南西海岸部で漁業や民俗知識について調査していたのだが、海岸部で使う船の材が森林地帯で伐りだされることから、山のほうでも生業や民俗知識を調査して、比較したいと思うようになった。

本来なら南西海岸部の後背地にあらたな調査地を見つけたほうがよかったのだが、いくつかの事情が重なって、首都を含む中央高地部がふたつめの調査地となった。この調査地では、偶然にもマダガスカルで唯一、「ザフィマニリの木彫り知識」が2008年にユネスコの無形文化遺産リストに記載されていた（2025年現在も唯一のまま）。このことがのちに、無形文化遺産や文化全般の問題に発表者が取組むきっかけとなった。

ユネスコ無形文化遺産は世界遺産や日本の指定無形文化財（あるいは指定無形民俗文化財）どちらが、面白い性格をもっている。ごく簡潔にいえば、「誰が見てもスゴイ」ととはいえないようなものでも、特定の（つまり一部の）グループの歴史やアイデンティティ、価値観などを反映していれば、無形文化遺産とみなされる。そして、しかるべき手続きを経て承認されれば、ユネスコの一覧表に記載されるのである（註1）。こうした「面白い」性格はさまざまな議論を内外にもたらしているようだが、なんのために文化遺産を伝えていくことが大事なのかという根源的な問いを関係者に投げかけており、その意味で発表者は、ユネスコ無形文化遺産の考えかたが社会のすみずみに浸透し、文化の意義について議論する機会が設けられること、そしてそれによって文化的相互理解にもとづいた社会が創られることを期待している。

発表ではザフィマニリの文化状況について話したほか、ヴェズの漁撈技術や漁撈知識がなぜ無形文化遺産と呼びうるかも紹介した。漁師たちの技術や知識は、特定の海産物を手に入れたいからといって体得できるものではなく、子どもの時期からおとなになるまで、たいへん長い時間をかけて共有される。時間をかけて身に着けた文化であるからこそ、いったんそれを体得した漁師は、他の漁師が発明したあたらしい漁具や漁法をすぐにまねるのである。言いかえれば個々の漁撈の技術や知識は、個人に属する知的所有物というより、共有された文化から生まれる文化的所産であり、文化のありかたを不斷に更新しつづける要素でもある。無形文化遺産というと、現代文化からきり離された過去の文化の遺物のように聞こえるかもしれないが（たとえばエジプトのピラミッド）、いまを生きる人の歴史

やアイデンティティに関わるものという定義をふまえるなら、むしろ文化要素を結びつける結節点やそれを包括する包装紙の役割をはたすことが多いのかもしれない。こうした文脈において、発表者は、文化と文化遺産を相互交換可能なことばとして用いている。本発表ではこうした考え方にもとづき、両者を厳密に区別しなかった。

2. モーリシャスの文化・無形文化遺産

発表ではまた、世界遺産のような「傑作」としての文化遺産とは対極的な事例として、マダガスカルにも近いモーリシャスのユネスコ無形文化遺産についても紹介した。2014年にユネスコのリストに記載された「モーリシャス島の伝統的セガ Segatipik Morisien」は、歌唱と音曲、舞踊が一体となった芸能で、現在では祝祭的な行事などのさいに実演される。もともとはヤギの皮を張った太鼓 ravanee と箱型のマラカス maravanne、金属製の打楽器 triangle など、音階よりもリズムを表現するパーカッションがもっぱら用いられていたが、のちにはアコーデオン lakordeon や電子楽器も用いられるようになり、他のジャンルとの違いが不明瞭になりつつある。

しかしモーリシャス島民（モリシアン）にとってみれば、楽曲のスタイルよりも、それが彼らの先祖の体験を反映しているということのほうが重要である。19世紀なかばまでにアフリカやマダガスカルから連れてこられた奴隸や、それ以降にインドや中国から連れてこられた契約労働者、そして当初は支配者として君臨したフランス人などさまざまな背景を持つ人たちが、セガの歌詞に登場し、セガを歌い奏でつづけてきた。この事実は、モーリシャス島というかぎられた空間のなかで多様な文化的背景をもつ人たちが交流し混淆してきたこと、そしてセガがその歴史とともに歩みつづけてきたことを示している。モーリシャス島のセガは、感情と結びついた価値、変化のなかでの持続、担い手の融和的拡大という3点において、学術的評価や外形の持続、継承者の特定を前提とした従来の文化遺産・文化財とは大きく異なっている。この場合、文化遺産でなく端的に文化と呼んだほうが、言葉としてふさわしいかもしれない。

こうしたあたらしいタイプの文化遺産は、まだ多くの問題を抱えている。ここでは、ユネスコ無形文化遺産リストに記載された他の物件（element）との関係から、ふたつの問題点を述べておこう。まず、2016年に同じモーリシャス政府が申請してリスト記載された「モーリシャス島のボージュプリー Bhojpuri 民謡とギート・ガワイ Geet-Gawai」がある。ギート・ガワイは、結婚の前にとりおこなわれる儀礼である。ボージュプリー語話者は、インド系モーリシャス人のなかでも一部の人たちにすぎないが、儀礼そのものは近年になってモーリシャスで有力になりつつあるヒンドゥー教と関連しており、インド的な文化的背景をもたない人たちにはそれほど関心をもたれない。世界的にみると一部の人たちにしか関係しないという意味で、セガとギート・ガワイはまったく同じ立場にあるが、モーリシャス国内でみると、関心度の差は歴然としている。ギート・ガワイのリスト記載は、今後、さまざまなミクロ・コミュニティの文化のブランディング競争に火をつける可能性がある。

次に、2019年にリスト記載された「チャゴス諸島の太鼓セガ Segatambour Chagossian」がある。ただしこの物件が記載されているのは、モーリシャス島のセガやギート・ガワイが記載されている「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表（代表的リスト）」ではなく、「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表（危機リスト）」のほうである（註2）。チャゴス諸島は、モーリシャス共和国が独立するときに帰属が定められず、イギリスとモーリシャスとのあいだで係争が生じた島で、実効支配し

ていたイギリスによって島民の島外退去が命じられ、現在は諸島内のディエゴ・ガルシア Diego Garcia 島が米軍基地となっている。このように類似した内容の文化遺産であっても、担い手が異なれば歴史も異なり、別個の文化遺産として扱わざるをえなくなる。当然、異なる危機にさらされるということになろう。こうした場合に、文化遺産の継承をどのような制度や慣例のもとにおこなえばよいか（チャゴス諸島の場合、ことは国際関係にまで関わっている）は、これから考えるべき課題である。

3. 文化はどこへ向かうのか

前節ではモリシアンの文化をセガに代表させたが、彼らの文化はもちろんそれにとどまるものではない。チャゴス諸島の例からわかるように、将来において存続をはかるべきはセガだけでなく、島民コミュニティそのものであり、セガはいわばその象徴というべきである。発表者が唯一会ったことのあるチャゴス島民の子孫は、トロント（カナダ）の会議に参加していたアーティストで、彼女の拠点はマンチェスター（イギリス）だった。彼女の芸術活動はコミュニティの存続というより、過酷な政治状況に置かれた人たちへの支援を目的としたものであり、関係者の意図はセガそのものの維持存続を大きく超えている。しかし文化というものの働きをよくよく考えてみると、背景が異なる人たちのあいだでコミュニケーションを促すという働きが、たしかに存在する。チャゴス島民の子孫は、特殊な政治目的を達成することより、この文化の働きを十全に活かしたいと考えているのではなかろうか。

文化についての考え方には多様であり、研究者や分野によって異なる。文化人類学者にかぎっていえば、それは天才が生みだした作品でもなく商品化しうる文化的コンテンツでもなく、言語から思考様式、生活様式といったあらゆる行動に関わるシステム的な事象の総体だと考える傾向が強い。こうした「行動の枠組み」は、現代社会において、生存のためだけの手段としては意味をもっていない。生存上の問題を解決するためだけなら、ホームセンターで売られている道具やインターネット上のさまざまなサービスを利用すればよく、先人から学んだり自分で工夫したりする必要はない。ヴェズやザフィマニリの人たちは、いまだに文化に依存する場面が多いものの、遅かれ早かれ、現金と引き換えに得られる商品やサービスで日常を成りたたせることになるだろう。

つまり、行動の枠組みとしての文化は、現在すでにかなりのていど解体が進んでいるのである。文化遺産は、かつてこの枠組みを構成する要素（文化的所産または文化的実践）だったが、要素間相互の結びつきを断たれて遊離し、さまざまな人たちの手で商品として取引きされている。文化人類学者が論じてきた文化の客体化・資源化は（註3）、こうした文化の断片化状況においてはじめて成立しうる。このように考えると、ヴェズやザフィマニリにおいては文化的所産が取引きされているものの、文化的アイデンティティや文化遺産についての考え方たがじゅうぶん浸透していない点において、文化システムの要素への断片化は日本ほどに進んでいないよう思える。

このように記すと、冒頭で述べた「長い時間をかけて他の人たちと共有していく文化」などもはや存在しないという意見が出るかもしれない。発表者はそのように思わない。生存のために文化を身に着ける必要はなくなったが、人間は依然として、時間をかけて隣人たちとなにかを共有しているのである。その役割はきわめて不分明であり、言語のようにいくつ身に着けたところで十分といえないものもあるが、それはたしかに社会の中で役立っているのである。そして、システム的な総体としての文化はもはや捉えにくいかもしれないが、文化的コンテンツとして取捨選択しうる衣装や料理な

どの文化は、依然として人びとの関心の的である。

モーリシャスでは、文化的所産を商品として取引きしない人たちですら、人びとの文化的アイデンティティの変容を危惧し、商品化しないかたちで文化的所産を利用しようとしている。政治的と思える分野にまで研究者の発言が及ぶのも、そのあらわれのひとつかもしれない。日本の研究者にとって、モーリシャスの研究者のふるまいは、じつは比較的理解しやすいと思う。無形文化遺産にとり組む研究者が一定数いて、日本での研究に関心を持っていることからも、文化遺産をめぐる国際共同研究のパートナーとしてモーリシャスは重要でないかと、発表者はひそかに考えている。

(註 1) このことに関しては、飯田卓（編）『文化遺産と生きる』臨川書店、2017 年を参照。

(註 2) 「代表的リスト」のほうにはモーリシャス島の伝統的セガとギート・ガワイのほか、2017 年に記載された「ロドリゲス島の太鼓セガ Segatambour Rodrig」がある。なお、世界遺産のほうにも、代表的リストにあたる「世界遺産一覧表」と、危機リストにあたる「危機にさらされている世界遺産の一覧表」のふたつがある。

(註 3) 太田好信「文化の客体化——観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4): 383–410、1993 年；森山工「文化資源使用法——植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」」山下晋司（編）『資源化する文化』pp. 61–91、弘文堂、2007 年。

マダガスカルスナガエル

井ノ上綾音（京都大学大学院理学研究科）

【和名】 マダガスカルスナガエル

マダガスカル固有の一属一種のカエル

【学名】 *Laliostoma labrosum* (マダガスカルガエル科マダガスカルスナガエル属)

【英名】 Madagascar bullfrog

頑丈な体つきと穴を掘る習性から英名で *bullfrog* と呼ばれるが、他の大陸に生息するウシガエル、アフリカウシガエル等を指す *bullfrog* とは近縁ではない。

【マダガスカル名】 Sahona

マダガスカルでは主に、カエルは種を区別せずまとめて *Sahona* (サフナ) と呼ぶことが多い。

【分布】 乾燥林の広がる西部に主に分布し、一部北部、中南部の高地の乾燥林にも分布する。

【系統地理】 本種の分布域は広いものの、個体群間の遺伝子流動は大きく、地域間の分化は見られない (Pabijan et al., 2015)。水源が不安定な乾燥環境では繁殖場所が変動しやすく、同じ繁殖地を繰り返し利用する傾向が少ない (Chan and Zamudio, 2009)。そのため、このような乾燥環境への行動的な適応が、本種の個体群間の遺伝的分化を全体的に低くしていると考えられている。

【形態】 大型でがっしりとした体つきのカエル。体サイズに性的二型があり、メスの頭胴長は 56–80 mm、オスの頭胴長は 44–56 mm である。体に対して頭部が大きく、幅広い口を持つ (Glaw et al., 1998)。

【生態】 雨季には地上の開けた環境を利用する。乾季には地面に潜って夏眠し、乾燥を耐え忍ぶ。本種の食性報告は限られているものの、その中で、カエルの一般的な餌資源である昆虫類以外に他のカエルを食べたという報告がある (Vences et al., 1999)。さらに、筆者が渡航した際に亜成体の本種が半樹上性のトカゲである *Paroedura vazimba* (オマキササクレヤモリ) を捕食している場面に遭遇した。これまでの報告は少ないものの、日和見的な捕食行動と大きな頭部・口幅、地上性で食物になる大きさの脊椎動物が多いことから、本種による脊椎動物の捕食は少なくないことが推測される。

【繁殖生態】 雨季の最初の大雨の約 1 ヶ月後に繁殖を開始し、雨季の間は雨の日に断続的に繁殖を行う (Mori et al., 2015)。雨季にのみできる一時的な水たまりの淵で繁殖する。“タタタタ...” という低

い周波数の振動のような鳴き声を発する。オタマジャクシは発生の過程で肉食になることがあり、同種あるいは別種のオタマジャクシを捕食することが報告されている (Vences et al., 1999)。



写真1. マダガスカルスナガエル（アンカラファンツィカ Ankarafantsika 国立公園）



写真2. マダガスカルスナガエルの幼体（アンカラファンツィカ国立公園）

参考文献

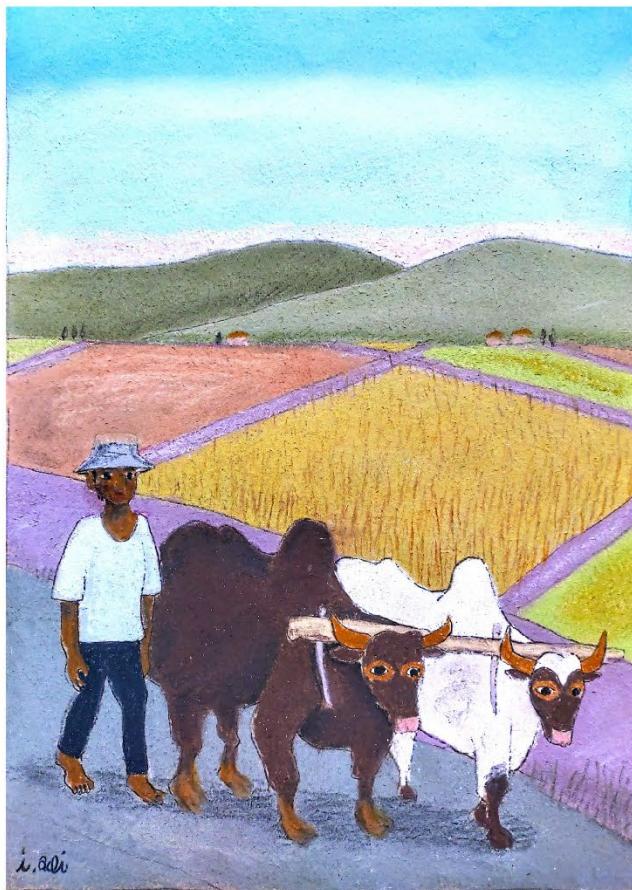
- Mori, A., Ikeuchi, I., & Hasegawa, M. (2015) Calling activity of an anuran assemblage in a temporary pond in a dry forest of Madagascar. *Current Herpetology* 34(2): 140–148.
- Glaw, F., & Vences, M. (2007) *A Field Guide to the Amphibians and Reptiles of Madagascar*. 3rd edition. Vences & Glaw Verlag, Cologne, 496 pp.

- Glaw, F., Vences, M., & Böhme, W. (1998) Systematic revision of the genus *Aglyptodactylus* Boulenger, 1919 (Amphibia: Ranidae), and analysis of its phylogenetic relationships to other Madagascan ranid genera (*Tomopterna*, *Boophis*, *Mantidactylus*, and *Mantella*). *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research* 36: 17–37.
- Vences, M., Glaw, F., & Zapp, C. (1999) Stomach content analyses in Malagasy frogs of the genera *Tomopterna*, *Aglyptodactylus*, *Boophis*, and *Mantidactylus*. *Herpetozoa* 11: 109–116.
- Pabijan, M., Brown, J., Chan, L., Rakotondravony, H., Raselimanana, A., Yoder, A., Glaw, F., & Vences, M. (2015) Phylogeography of the arid-adapted Malagasy bullfrog, *Laliostoma labrosum*, influenced by past connectivity and habitat stability. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 92: 11–24.
- Chan, L., & Zamudio, K. (2009) Population differentiation of temperate amphibians in unpredictable environments. *Molecular Ecology* 18: 3185–3200.

Moi et Madagascar vol.32

私とマダガスカル

絵・文
元青年海外協力隊
マダガスカル隊員石田



マダガスカルに来て驚いたことは沢山ありますが、その中の一つはコブ牛が普通に道路を歩いていることです。車が走る国道にも、ゆっくりと歩く姿が見られます。

コブ牛はゼブ（zébu）と呼ばれ、大きなコブと背中の盛り上がりが特徴です。マダガスカルでは、人の数よりゼブの数の方が多いとも言われています。農耕や運搬はもちろん食事や儀式の供物として使われ、様々な場面で活躍しています。

代表的な料理には、野菜とゼブ肉の煮込み料理のルマザヴァ（romazava）や、串焼きがあります。ゼブの肉は硬いので、私は肉をとても小さく切って焼いた串焼きが好きです。

また市場では、ゼブの角で作られた小物が売られています。スプーン等のキッチン用具、櫛やブレスレットやネックレスのアクセサリーがあります。これらは角から作られているの？と驚かされます。白黒、こげ茶の角の自然の色そのままで出来ています。

さらにゼブの骨は、呪術や占いにも使用され、文化や信仰とも深く結びついています。

こうして改めて見てみると、ゼブは生きている間も、命を終えた後にもマダガスカルの人々の生活に深く根ざした、なくてはならない大切な存在なのだと感じます。

ツィリーツイ

堀内 孝（写真家）

今年、サカラヴァ・メナベ Sakalava Menabe 王国のトゥエラ Toera 王（1860-1897）の頭骨がフランスから返還される。トゥエラ王は1897年、マダガスカルに侵攻するフランス軍によって捕えられ、旧王都のアンビーキ Ambiky で斬首された。その後、頭部はフランスに持ち去られ、長い間行方不明になっていた。王族の故カマーミ・マグロワール Kamamy Magroire 氏（2018年にサカラヴァ・メナベ王に即位）は数十年前からフランス側に調査を依頼。パリの人類博物館に保管されていることがわかり昨年、ようやく返還が決まった。

サカラヴァ・メナベの王族の発表によると、5月にルハヴーニイ Lohavogny と呼ばれる墓掃除の儀式を行い、頭骨の返還を待って、8月にツィリーツイ Tsiritsy を執り行うという。ツィリーツイについては31号でも少し触れたが、サカラヴァ・メナベの王族が行う改葬祭のことだ。彼らは、王や王族が亡くなると、遺体を仮埋葬し、この祭りを行って王墓に本埋葬するのである。今号では、以前取材したその内容について紹介したい。

この祭りを知ったのは首都アンタナナリヴ Antananarivo にあった旅行代理店トロピカ・トゥーリング Toropica Touring を訪ねた時だった。何かマダガスカルらしい祭りがないかと尋ねると、経営者の故ラハリソン・トゥーサン Raharison Toussaint 氏がこの祭りを教えてくれたのだ。著名な写真家でもある彼は、人脈も豊富で、祭りの責任者であるカマーミ・マグロワール氏を紹介してくれた。

祭りの期間は1993年9月23日（木）から30日（木）までの8日間だった。21日の夕方、タクシー・ブルース Taxi-brousse で西部の町ムルンダヴァ Morondava へ移動し、さらに車と船を乗り継いで、翌日の昼過ぎにベル・スール・ツィリビヒナ Belo sur Tsiribihina に着いた。ホテルはどこも満室だったので、船着場から道案内をしてくれたヘンドリックさんの家にお世話をになった。

祭りの初日はヘンドリックさんとともに市場に行き、数日分の食料とランバフアンニ lambahoany を調達した。祭りに参加する際は、必ずこの布を腰に巻かなければならぬのだ。荷物の準備が整うと、彼に用意してもらった牛車に乗り込み、ベルの東約12キロにあるマハヴェル Mahavelo 村へ向かった。そこにツィリーツイが行われるツィアニヒ Tsianihy の王墓があるのだという。到着まで2時間はかかると言われたが、偶然通りかかったカマーミ家のピックアップトラックに拾ってもらい、1時間ほどで着くことができた。

早速、マグロワール氏に許可をもらい、ランバフアンニを腰に巻き、靴を脱いで王墓の敷地に入った。広い敷地の真ん中にはハズマンガ hazomanga と呼ばれる木製の柱が立っていた。その東にタマリンドの大木があり、近くにアルダーヒ alodahy という仮設の小屋が建てられている。この小屋はサカラヴァ・メナベ王国の王靈を宿したサズカ sazoka と呼ばれる靈媒師が休む場所だという。



サカラヴァ・メナベ王国の王靈が憑依したサズカと呼ばれる靈媒師たち



王族の女性たちは毎夜、サズカを前にクルンドゥイという祖先を讃える歌を歌う

ハズマンガの南には切り妻屋根を乗せた家型の墓と石造りの墓が並んでいた。トウエラ王のほか、息子のカマーミ・ピエール Kamamy Pierre 王など、カマーミ家の王や王族が眠るという。日が暮れる

と、王族の女性たちが墓に向かって座り、小気味よい太鼓のリズムに合わせて歌と手拍子を始めた。クルンドウイ *kolondoy* と呼ばれる王国の祖先を讃える歌だ。王靈が憑依したサズカたちはアルダーヒに集まり、満足そうにその歌声に耳を傾けていた。

翌朝、ホラ貝を吹く男性を先頭に、王族の女性たちが、ゴザ、香炉、聖水、酒（はちみつから作ったもの）を持ち、墓の前に進んだ。そして墓に酒を供え、皆で祈りを捧げた。それが終わると、王族たちは午前中いっぱいかけて丁寧に墓の掃除を行った。夕方、タマリンドの木の下でクルンドウイが始まった。サズカたちが木の下にやってきて、女性たちとダンスを楽しんでいる。亡き王たちと王族たちによる和やかな宴は夜遅くまで続いた。

3日目の早朝は牛が屠られた。今日から棺作りを始めるが、選んだ木に牛の心臓を供えるのが慣わしだという。男性たちは牛を解体して肉の分配を終えると、牛の心臓を持って 12 キロ離れた森へ出発した。残念ながら、砂ノミで足先が化膿したため同行できず、儀礼の様子は撮影できなかった。夜はクルンドウイに続き、男性たちによるムレンギ *moraingy* が行われた。ムレンギはボクシングに似たマダガスカルの格闘技だ。軽やかな縦笛の音楽が演奏される中、男性たちは対戦相手を選び、闘志あふれる戦いをして勇気と力を誇示していた。熱狂した男性が荒々しく呼吸するように歌うカガーキ *kagnaky* という音楽もエネルギーで印象的だった。



森の中で棺を加工する男性たち。王と王族の棺はナトゥという特別な木から作られる

4日目は、カマーミ家のピックアップトラックに乗せてもらい、棺の加工が行われている森を訪ねた。棺用に切り出されたのはナトゥ *nato* という木だった。王や王族の棺には必ずこの木を使わなければならないという。男性たちは切り出した木を別の場所に移し、1992年1月と3月に亡くなったふたりの王族のために、ハズラヒ *hazolahy* と呼ばれる蓋の部分とハズヴァヴィ *hazovavy* と呼ばれる本体部

分を二組作っていた。非常に硬い材質のため加工には苦労していたが、男性たちはトーカガシ toakagasy (サトウキビの蒸留酒) を飲みながら、なごやかに作業を進めていた。クルンドゥイとムレンギはその晩も行われた。

5日目になり、再び牛が屠られた。これは王族たちの食料にするためだという。日中はアルダーヒにサズカが集まり、王族専属のヴァリーハ variha 奏者である故ママ・サーナ Mama Sana の音楽に耳を傾けていた。ヴァリーハの波のように繰り返すリズムとしづがれた味のある歌声が心地よい。夕方になると、王靈を憑依したサズカたちがタマリンドの木の下に出てきたが、クルンドゥイを行う女性が集まらないことに腹を立て、アルダーヒに帰ってしまった。それに気づいた女性たちが慌ててアルダーヒの前に集まって盛大なクルンドゥイを行い、無礼を詫びた。女性たちの熱気あふれる歌声と手拍子は夜遅くまで響いていた。



サズカのためにヴァリーハを演奏するママ・サーナ

6日目は、墓の前でカマーミ家の年長の女性とサズカによる会合が行われた以外は、特別なプログラムはなかった。男性たちによる棺の加工はこの日も終日進められた。続く7日目も午前中は主だったプログラムはなく、午後になると女性たちによる石造りの墓の塗装作業が行われた。

夕食後、王墓近くの広場で映画の上映と生バンドの演奏が始まった。王族ばかりでなく、周辺の村からも大勢の人たちが集まっている。子供たちはアクション映画に見入り、着飾った若い男女はメナベ地方の軽快なリズムの音楽に乗って朝方までダンスを楽しんでいた。

祭りの最終日は早朝に牛が屠られた。解体が終わると、王靈を憑依したサズカ、クルンドゥイを行

う女性たち、そして王族たちが墓の前に集まつた。女性たちは皆、髪を分割してだんご状に丸めたドウクドウク *dokodoko* という髪型をしている。儀礼の時に結う正式な髪型だという。続いて、香炉、聖水、酒が運び込まれた。



最終日の早朝、王墓に祈りを捧げる王族たち

香が焚かれる中、サズカのひとりが王族ひとりひとりの額にテブキ *teboky* と呼ばれる牛の血を塗つていった。これと並行して、王族の男性たちは墓の入り口に酒を捧げ、扉を開けた。すべての戸が開けられると、テブキをつけた女性たちは用意した野蚕の布を持ち、墓の中に入った。その布で王と王族の遺骨を包むのだという。私もテブキを額につけてもらい墓前に進むことはできたが、内部に入つてその様子を撮影することは許されなかった。この王と王族たちの改葬儀礼は昼頃まで行われた。



王靈を憑依したサズカからテブキと呼ばれる牛の血と聖水を授かる王族の女性



ツィリーツイでは、女性たちが王と王族の墓に入り、遺骨を野蚕の布で包み直す

夕方になると、王族たちは完成した棺を取りに森へ向かった。「フマ、フマ、ケーリ homa homa kely！」と歌う女性たちの大合唱が夕闇の森に響く。到着すると、男性たちは棺を担いで出発した。よろよろ

と大きく蛇行しながら進んでいるところを見ると、相当な重さのようだ。女性たちは男性たちを鼓舞するように熱狂的に歌い、その場を盛り立てている。



女性たちの大合唱が響く中、完成した棺を担ぎ、王墓へ向かう男性たち

やがて棺が王墓に到着し、アルダーヒの横にある仮埋葬墓の前に置かれると、ホラ貝が鳴らされた。アルダーヒには王靈を宿したサズカが勢揃いし、女性たちの行うクルンドゥイに耳を傾けている。そして10時を過ぎたころ、王族の男性たちが仮埋葬墓を掘り返し始めた。残念ながら、ここから先の様子も禁忌のため撮影は許されなかった。マグロワール氏に確認したところ、遺骨は1時間ほどで掘り出され、無事棺に納められたという。そして王族全員が見守る中、王墓の一角に埋葬され、深夜0時に祭りは終了した。

サカラヴァ・メナベの王族がトウエラ王の頭骨の返還を求め続けたのは、遺骨が完全に揃わないと祖先になれないからだという。ツィリーツィを執り行い、王墓に頭骨が埋葬されて、ようやく子孫を守る祖先になれるのである。

またサカラヴァ・メナベでは王が亡くなると、遺骨から頭骨の一部や歯、爪などを取り出し、ダディ dady と呼ばれる聖遺物を作る風習がある。頭骨が返還されれば、待ち望んでいた彼のダディも完成する。ツィリーツィに先立って、聖遺物を納める建物であるズンバ zomba を旧王都のアンビーキに建てる計画もあるという。

ツィリーツィが終わり、準備が整えば、いずれフィタンプハ Fitampoha が行われる。ダディをツィリビヒナ Tsiribihina 川で沐浴させて、王族やメナベ地方の人びとの守護を祈願する祭りだ。歴代の王10人のダディが揃ったフィタンプアはどんな祭りになるのか、今から楽しみである。



ツィアニヒの王墓にあるトゥエラ王の墓

マダガスカル北西部で栽培される マンゴー多様性の世界

篠村茉璃央（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

はじめに

マンゴー (*Mangifera indica*) は、南アジアから東南アジア地域を原産とする果樹であり (Mukherjee and Litz, 2007)、世界でもっとも品種の多様な栽培果樹のひとつです。現在、世界中で 1,000 を超える品種が記録されており、果実の色や形、大きさ、味に至るまで、きわめて幅広いバリエーションがあります (Ediriweera et al., 2017)。

マダガスカルではマンゴーは導入作物ですが、全国各地で栽培されています。とりわけ北西部では生産が盛んですが、同国では大規模な商業栽培は展開されておらず、国際市場で広く流通しているような商業品種はほとんど農村へ導入されていません。各地で栽培されているのは、もっぱらマダガスカル特有の地方品種です。マダガスカルにおけるマンゴーの研究は、1960～70 年代のいくつかの報告と、1980 年代の研究に限られており (Lefebvre, 1965; Fouqué, 1974; Gaydou, 1984)、現地の品種の多様性や地方品種の名称の体系については、これまでほとんど記録されていませんでした。

筆者はマダガスカル北西部地域に位置するアンカラファンツィカ Ankarafantsika 国立公園（以下、AKF）を調査地とし、2022 年 9 月から 2024 年 12 月までの間に、断続的に 4 度のフィールドワークを実施してきました。AKF は、ブラウンキツネザルやハシナガオオハシモズなど、本誌でもたびたび紹介されてきた多様な野生動物の生息地です。さらに、白砂の上に成立している季節的乾燥林という、特異的な自然環境でも知られています (Fujimoto et al 2024)。首都アンタナナリヴ Antananarivo から陸路で 12 時間近くかかり、交通の便の良い場所ではありませんが、こうした在来の自然環境を目がけて、国内外から観光客や研究者が訪れています。AKF ではマダガスカル国立公園 (Madagascar National Parks: MNP) の定めるゾーニングシステム (MNP 2017) により、公園内的一部の土地が「持続可能利用ゾーン」として地域住民の利用に開かれています。このため、公園内では人々が居住し、稲作などの生業活動へ従事するだけでなく、人々の管理の手を離れた「野良」マンゴーが自由に生育する光景も見られます。

調査地では、11 月にもなれば丸々と熟したマンゴーが枝をたわませており、黄色く輝く果実は遠くからでもよく目立ちます。特に首都アンタナナリヴ方面から公園に入り、最初に見えてくるアンブディイマンガ Ambodimanga 村は、公園内でも屈指のマンゴーの木の多さを誇っています。この村の共有林の中には、十分に熟した状態でもまだ緑色の、いわゆるグリーンマンゴーがたくさんあります（完熟するとクロロフィルが分解されて、黄色っぽくなります。）(図 1)。更に果梗（いわゆるヘタ）のまわりがほんのり赤く色づくものもあります。他にも、大きいものや小さいもの、丸かつたり平たかつたり細長かつたりと、形態の多様性は何通りにもなるバリエーションがあります。



図1. 「ブリィ」マンゴー

「丸い」というその名の通り、丸々とした球状のマンゴーである。

筆者は、こうしたマンゴーの姿を眺めるうちに、AKF 内だけでなく、マダガスカル北西部全体では、いったいどのようなマンゴーの果実が存在しているのか、その多様性のありさまを知りたいと思いました。また、それらの果実が、地域の人々によってどのように名付けられ、どのように区別されているのかについても関心を持ちました。

これらの疑問に答えるため、まずはマダガスカル北西部の都市マジャンガ Mahajanga の市場やアンブディマンガ村の共有林から異なる品種の果実サンプルを収集し、各品種の形態や味の特徴を分析することで、どのような形質が各品種を特徴づけているのかを明らかにしました。さらに、マンゴーが地域の人々によってどのように名付けられ、分類されているのかを知るために、旧マジャンガ州を構成していたボエニ Boeny 県やベチブカ Betsiboka 県のみならず、北部のソフィア Sofia 県、ディアナ Diana 県も射程へ入れ、北西部地域全体を視野に入れた広域のインタビュー調査を計画しました。

この記事では、調査で明らかになったことの一部をご報告します。お読みいただいた後には、マダガスカルで出会うマンゴーが、これまでよりも少し解像度が上がって見えてくるかもしれません。以降のパートにおいては、まずインタビュー調査の内容を先にご紹介します。

マダガスカル北西部地域のマンゴー調査

調査は 2023 年 11 月と 2024 年 10 月に行われました。この時期はマンゴーの収穫期にあたります。マダガスカル北西部沿岸地域は、熱帯半乾燥林を成立させる顕著な乾季と雨季という気候が特徴的な地域です (Nematchoua et al., 2018)。さらに海拔 200 m 以下の低地が大半を占めており (Kusky et al., 2007)、これらの条件が、マンゴーの開花・結実に適した環境を提供しています (Bompard, 2009)。当地域では、マンゴーは人々の居住地周辺に植栽されたり、道路脇に自生したりしています。大規模に果樹園を造営した商業的な栽培よりも、各々の世帯で敷地内に粗放的に維持されている木が利用されていることが多いです。

本調査では、首都から北西部海岸のマジャンガまで続く国道 4 号線（以下、NR4）および、北西部 NR4 上の街アンブンジュマミ Ambondromamy から分岐し、北端のアンツィラナナ Antsiranana（別名

ディエゴ・スアレス Diego-Suárez) まで縦断する国道 6 号線（以下、NR6）沿いの都市および農村を訪問しました。NR4 は植民地期初頭に建設された歴史的な幹線道路で、首都と稻作地帯を結び、国内流通において重要です。一方の NR6 は独立後に整備され、主に輸出作物の物流に関わっています（Revue de Madagascar, 1949 [2021 年オンライン掲載]）。NR4 では、4 つの市場と、7 つの農村、NR6 では 5 つの市場、6 つの農村を調査地とし、合計 22 サイトを選出しました（図 2）。

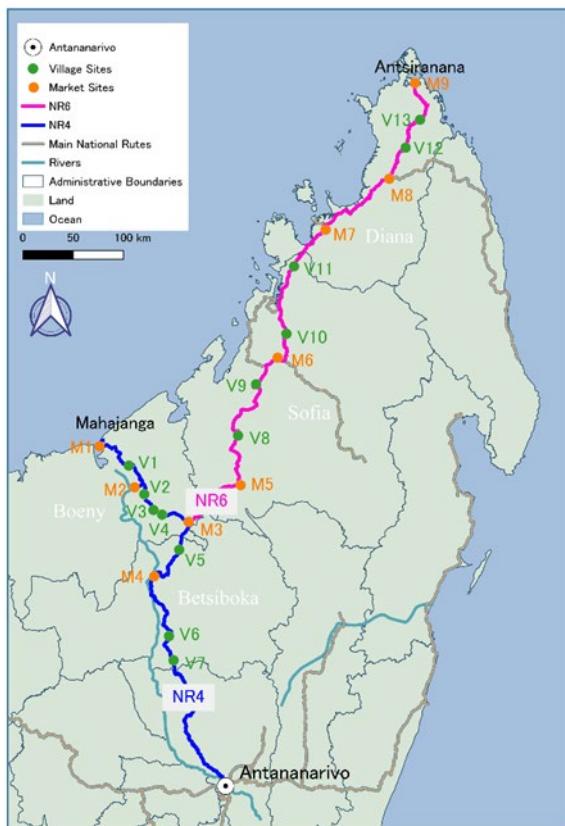


図 2. 広域インタビュー調査の地図

道路について、青色が国道 4 号線、ピンク色が国道 6 号線を示す。
サイト名では、オレンジ色が市場、緑色が農村を示す。

マダガスカル北西部の人口は、サカラヴァ Sakalava 民族を中心的構成要素とし、最北部はアンタンカラナ Antankarana 民族を主要な構成民族としています（Allen, 1995）。2 つの国道が縦断するベチブカ県、ボエニ県、ソフィア県、ディアナ県では、人口の 75% が農業に従事しています（Institut National de la Statistique, 2020）。

広域インタビュー調査では、市場 88 名、農村 142 名、計 230 名（女性 157 名、男性 73 名）から、彼らが栽培しているマンゴーや、その地方品種の名称、また各種類のマンゴーにはどのような特徴があるのかについての情報を得ました。市場では価格の情報も併せて記録しました。

各品種の果実の特徴の分析では、14 品種の熟した果実をそれぞれ 20 個ずつ収集し、果皮の色、形状、重量、糖度、pH、種子の形状、胚のタイプ（単胚性・多胚性）などを記録しました。胚のタイプに注目したのは、マンゴーの胚のタイプ（単胚性・多胚性）が、親の形質が実生へどのように引き継がれるかを決定づける重要な特徴であるからです。単胚性の場合、これはいわば「一人っ子」で、種

子の中にはひとつだけの胚があり、ひとつの芽しか出できません。この芽は、両親の品種の形質を受け継いだハイブリッドとなっています。これに対して多胚性の場合はいわば「五つ子や六つ子」です。ひとつの種子の中に複数の胚が存在し、そのうち元気に育つのは、ほとんどが母親と同じ遺伝子をもつクローンです。このため、種子から苗木を育てたとき、多胚性の品種では親と同じ形質をもつ苗が得られる可能性が高いのに対し、単胚性の品種では、親とは異なる特徴をもった苗が生じることが多いのです (Saúco et al., 2021) (図 3)。



図 3. 多胚性の種子と単胚性の種子

以上のように収集したデータは非計量多次元尺度構成法 (NMDS) という方法で分析しました (Kashin et al., 2024)。これは果実の個々の形質のデータについて、似ているもの同士を近くに、似ていないもの同士を遠くに配置して、見た目の特徴を「一目でわかる」ようにする方法です。

マンゴーは 3 つのグループに分類できる

インタビュー調査の結果、NR4 と NR6 双方の地域全体で認識されているマンゴーの名称は 126 種類にのぼり、うち海外から輸入された国際商業用品種を除いたマダガスカルの地方品種の名称は 113 種類でした。实物を観察することのできた品種は、地方品種と国際商業用品種を合わせて 48 種類でした (図 4)。種子からマンゴーを育てることが一般的なマダガスカルの農村では珍しい、接ぎ木で増やす国際商業用品種は、フランス語の「接ぎ木 (greffage)」に由来する「Greffy」と呼ばれ、「外国のマンゴー」として区別されていました。この国際商業用品種は、苗木も果実も農村には流通しておらず、その存在を知っている人もマジャンガ周辺地域に限られています。回答者全員が挙げた地方品種名の合計数のうち、国際商業用品種が占める割合はわずか 2.8% にすぎませんでした。

そのほかの品種は、マダガスカルの地方品種と呼べますが、「Diego」「Hiesy」「Zanzibar」の 3 種類は顕著な認知度を示していました。そのほかの地方品種とは明らかに知名度が異なるので、これらの品種を以降まとめて、それぞれの頭文字をとった DHZ と呼びます。DHZ 以外の地方品種 (収集された品種名の大部分を構成する) はまとめて「マダガスカルの」を意味する「Malagasy」から「Gasy」と呼ばれています。これらの分類は、個人で多少の異同はある、多くの住民によって認識されていました (図 5)。



図4 実物が観察されたマダガスカルのマンゴー

地方品種だけではなく、Irwinなどの国際商業用品種も含めて撮影している（右寄りの赤色を中心とする品種）。右下の青色のバーは約10cmを示すスケール。

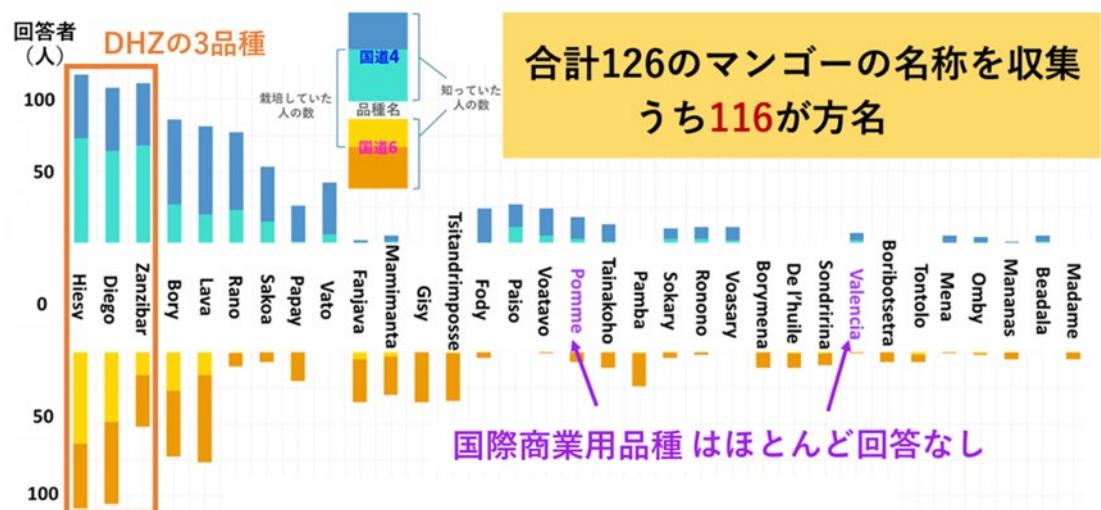


図5. 5人以上から名称が聞き取られたマンゴー

DHZ（オレンジ色の枠で囲んだもの）、および国際商業用品種（紫色の矢印）以外はすべてGasyに分類されるマダガスカルの地方品種の名称。

また、インタビューで各地の農村を回る際、マンゴーの木々を観察していると、国際商業用品種とDHZおよびGasyには、生育場所にも異なる傾向が見られました。国際商業用品種はそもそも農村地域では栽培している人々が大変少なかったのですが、一部の栽培者によって果樹園が造営され、集約的に栽培されている傾向がありました。DHZは人々の居住地の近くで、庇陰樹としての役割も兼ね、ゆるやかに管理される場所で栽培されている傾向がありました。これらに対し、Gasyは、道路や河沿

い、また共有林内部など、粗放的な管理がされる土地、または管理者が全くいない場所で自生している例が多くみられました（図 6）。



図 6. 品種グループごとの栽培・生育場所の傾向

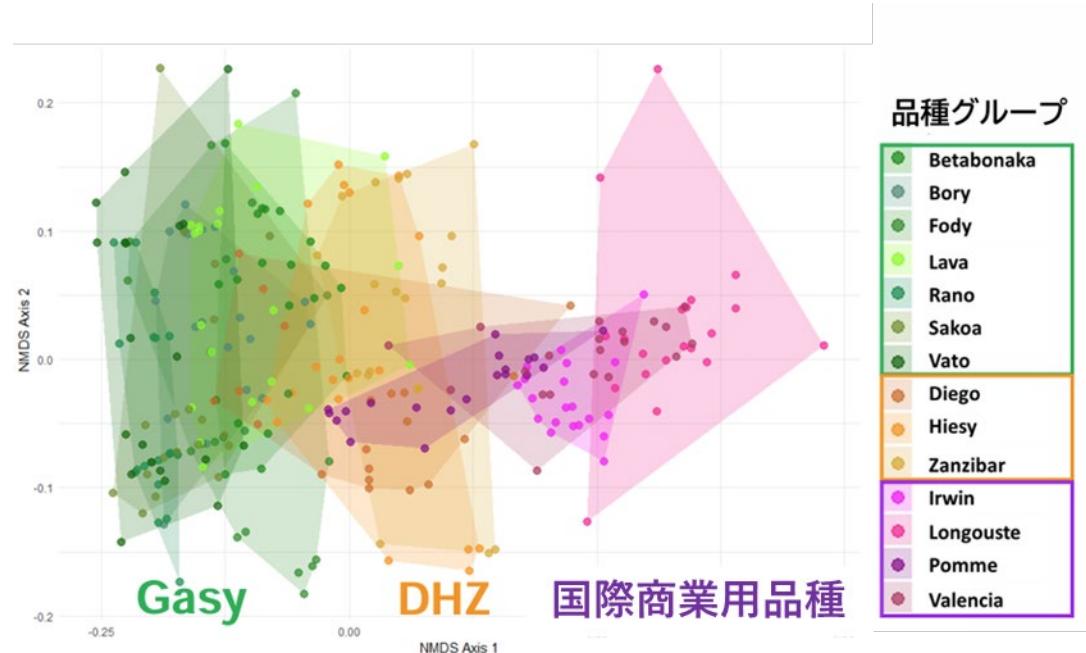


図 7. NMDS によるプロット
品種グループごとに色分けした。

地方品種の名称の意味や由来には、Bory（丸い）、Lava（長い）など果実の形や、Paiso（桃）など見た目に基づく名称が最も多く、そのほか他植物名、比喩表現、動物名、地名などに由来するものもありました。

収集された 14 品種の果実について、NMDS による分析では、国際商業用品種、Gasy、および DHZ の三グループが明瞭に分離されました（図 7）。とくに国際商業用品種は果実が重く厚みがあり、pH が高く（つまり「酸っぱくない」）、種子が平たいなどの特徴で区別されました。胚は单胚・多胚のどちらのタイプもありました。価格は 1 つあたりで百数十円程度です。Gasy は緑色の果皮と果実重量に

占める大きな種子重量比を特徴としました。胚はどちらのタイプもありましたが、单胚が多い傾向にありました。また価格は1つあたり数円程度であり、とても安価でした。DHZは国際商業用品種とGasyの中間的な特徴でまとまりを示し、さらに全てが多胚でした。価格は1つあたり20~30円程度です。

品種グループの栽培の特徴

Gasyは同じ種類とされる果実でも、形にはらつきが大きく、品種としての識別が困難な場合も多いため、「品種」というよりも「系統」として捉えるほうが妥当だと考えられます。国際商業用品種は可食部が大きく、高い市場価値を持ちますが、人々の認知度は低いです。DHZは形態的にGasyと国際商業用品種の中間的な特徴をもち、栽培数・認知度ともに高い傾向にあります。このようにGasyよりも改良品種的な特徴をもつDHZは、品種の原産地が不明なもの、マダガスカルへの導入後に長い栽培期間を経て定着したと考えられる「外来タイプの地方品種」(allochthonous landrace)として位置づけることができます(Villa et al., 2005)。

一部の農村では高価に販売できる国際商業用品種の導入を希望する声があるものの、苗木を入手することが困難であることや、稻作という労働集約的な本来の生業(IFAD, 2025; Minten and Barrett, 2005)があることから、果樹園の造営へ投入できる資源が制限されており、普及は限定的です。また農村社会においては持ち主のいる果樹でも、落ちた果実は自由に拾うことが許容されていることが多いので、一般的には手間や費用をかけてまで果樹を栽培する動機が弱いかもしれません。

DHZは多胚性のため、種子で増殖することが一般的な農村の栽培慣習の中で、果実の品質を維持するのに好都合なようです。これらの品種は、知名度・栽培数の両面でゆるぎない地位を確立しています。有名な品種であることが、市場で販売して現金収入源にする際にも有利に働くようです。

Gasyは共有林や川辺林など、人の管理の少ない環境で自生的に生育しており、その果実はフリーアクセスであることが多いために国際商業用品種やDHZなどのグループとは栽培において直接的には競合しなさそうです。人々が投げ捨てた種からGasyが自然に生え、定着できるような環境の保全は、Gasyの多様性維持にとって重要そうです。

調査地が多様なマンゴーを観察できる土地であったという幸運から生まれた「マダガスカル北西部地域には、いったいどのようなマンゴーの果実があるのか」、「それらは地域の人々によってどのように名付けられ、区別されているのか」という疑問探究の旅の結果の一部をご紹介しました。この調査によって、雑多に見えるマダガスカルのマンゴーの中にも、形質のまとまりや利用の特徴をもった、いくつかのグループが存在することを見出すことができました。

調査を通じて、アンブディマンガ村でいちばんマンゴーに詳しいマリイおじさんから地方品種のマンゴーの見分け方の基本を学びました。この知識を中心として、他地域で身に着けた感覚に基づき、本稿の最後に、北西部地域に流通しているマンゴー品種分類の技を紹介します。品種の分類の知識や基準は、世帯や個人の経験や、果実個々の特徴に依存している部分が大きいため、これを流派になぞらえて「マジャンガ流アンブディマンガ派マリイ系」と銘打ち「ヤモリでもわかる！」¹マダガスカルのマンゴーを見分けよう！フローチャート」を付録とします。

¹はじめは「シファカでもわかる！」と宣伝していましたが、メンターである佐藤宏樹准教授に「シファカには赤色がわからない」とのご指摘を受け、赤色を認知できるヤモリへ変更しました。



図 8. 道路脇のマンゴーの木

一日に何度もトラックが通行するため、コンテナの形に枝が四角くトリミングされている。

引用文献

Allen, P. M. (1995) *Madagascar: Conflicts of Authority in the Great Island*. Routledge.

DOI: <https://doi.org/10.4324/9780429036057>

Camacho Villa, T. C., Maxted, N., Scholten, M., & Ford-Lloyd, B. (2005) Defining and identifying crop landraces. *Plant Genetic Resources* 3(3): 373–384.

DOI: <https://doi.org/10.1079/PGR200591>

International Fund for Agricultural Development.

(Retrieved 14 April, 2025 from <https://www.ifad.org/en/w/countries/madagascar>)

Ediriweera, M. K., Tennekoon, K. H., & Samarakoon, S. R. (2017) A review on ethnopharmacological applications, pharmacological activities, and bioactive compounds of *Mangifera indica* (Mango). *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine* 2017(1): 6949835.

DOI: <https://doi.org/10.1155/2017/6949835>

Fouqué, A. (1973) Rendements de Quelques Variétés de Manguiers à Madagascar. *Fruits* 2(6): 482.

Fujimoto, Y., Kaneko, T., Sato, H., Rakotomamonjy, A. H., Razafiarison, Z. L., & Kitajima, K. (2024) Topographical gradient of the structure and diversity of a woody plant community in a seasonally dry tropical forest in northwestern Madagascar. *Ecological Research* 39(5): 705–716.

Gaydou, E. M., & Bouchet, P. (1984) Sterols, methyl sterols, triterpene alcohols and fatty acids of the kernel fat of different malagasy mango (*Mangifera indica*) varieties. *Journal of the American Oil Chemists Society* 61(10): 1589–1593.

DOI: <https://doi.org/10.1007/BF02541638>

- Kashin, A. S., Parkhomenko, A. S., Kondrati, A. O., Kritskaya, T. A., Bogoslov, A. V., & Shilova, I. V. (2024) Diversity of the genus *Chondrilla* L. (Asteraceae) in Eastern Europe. *Biodiversitas* 25(5): 1901–1910.
DOI: <https://doi.org/10.13057/biodiv/d250506>
- Kusky, T. M., Toraman, E., & Raharimahefa, T. (2007) The Great Rift Valley of Madagascar: An extension of the Africa–Somali diffusive plate boundary? *Gondwana Research* 11(4): 577–579.
DOI: <https://doi.org/10.1016/j.gr.2006.11.009>
- Lefébvre, A. (1965) Les Fruits sur les Marches de Majunga. *Fruits* 20(2): 79–85.
Madagascar National Parks. International Fund for Agricultural Development.
(Retrieved 14 April, 2025 from <https://www.ifad.org/en/w/countries/madagascar>)
- Mukherjee, S. K., & Litz, R. E. (2007) Introduction: Botany and importance. In: Litz, R. E. (ed.) *The Mango: Botany, Production and Uses, 2nd Edition*, UK: CAB International. pp 1–18.
- Nematchoua, M. K., Ricciardi, P., Orosa, J. A., & Buratti, C. (2018) A detailed study of climate change and some vulnerabilities in Indian Ocean: A case of Madagascar island. *Sustainable Cities and Society* 41: 886–898.
DOI: <https://doi.org/10.1016/j.scs.2018.05.040>
- ONG Lalana (1949) Routes et transports à Madagascar, ONG Lalana.
(Retrieved 28 April, 2025 from <https://www.lalana.org/fr/road-detail/2/naissance-du-reseau-routier>)
- Saúco, V. G., Pinto, A. C. d. Q., Mitra, S. K., Faleiro, F. G., & Ferreira, F. R. (2021) Mango propagation. In: Chittaranjan, K. (ed.) *The Mango Genome*, Springer Cham. pp. 31–44.
- Institut National de la Statistique (2020) Troisième recensement général de la population et de l'habitation (RGPH-3): Résultats globaux du recensement général de la population et de l'habitation de 2018 de Madagascar. In : S. G. Ministère de l'Économie et des Finances, Cellule Centrale d'Exécution du Recensement (ed.).

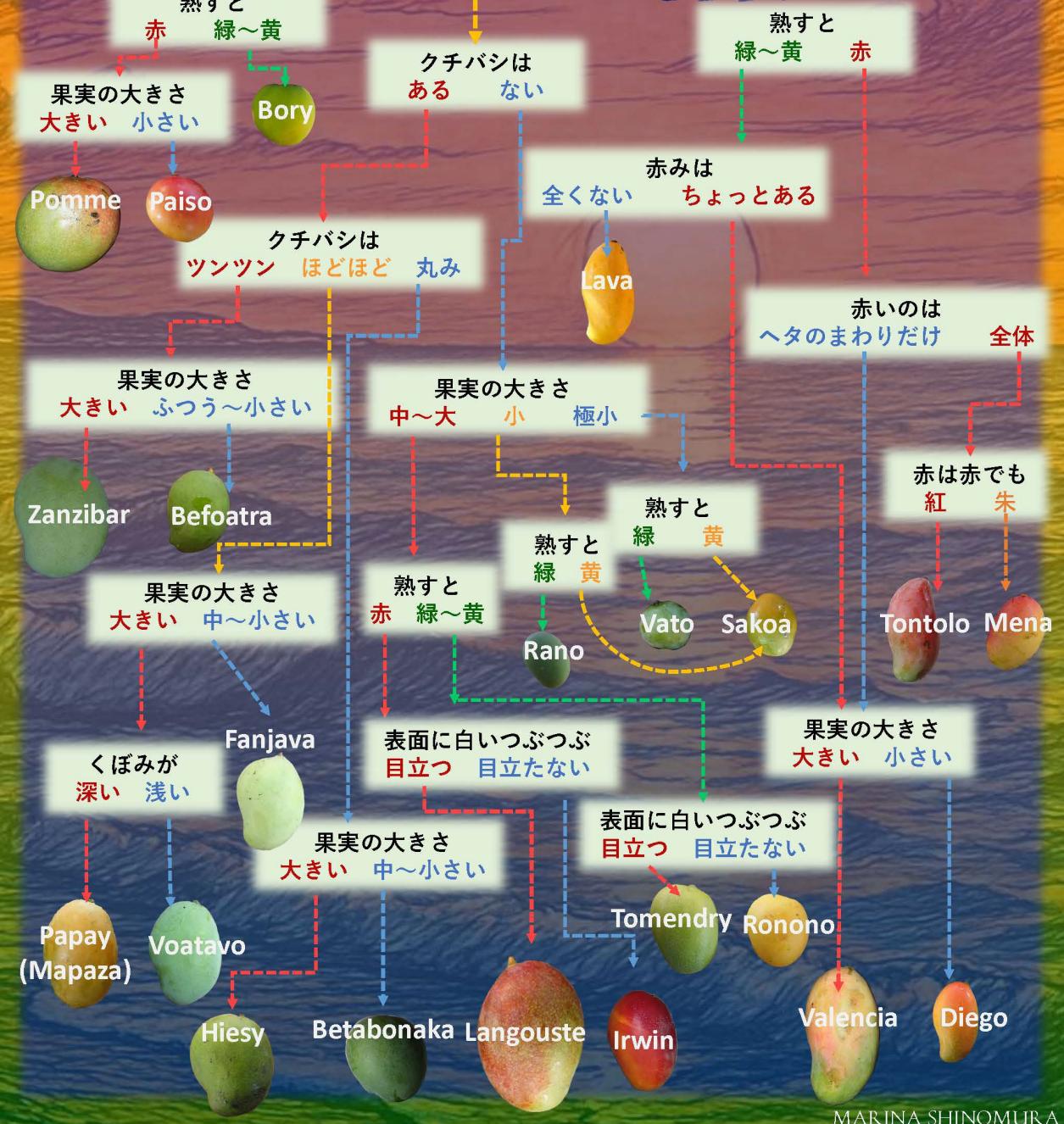
ヤモリでもわかる！マダガスカルのマンゴーを見分けよう！フローチャート

そのマンゴーは

まんまる

楕円形

細長い



MARINA SHINOMURA

追悼：深澤秀夫先生

深澤秀夫先生のこと

2025年4月 原田新二

深澤先生とは2001～2002年頃アンタナナリブで初めてお会いしたように思う。

先生は下戸、私は酒飲みであるにもかかわらず、あっという間にお付き合いが深まった。先生の奥様、私の妻子を含めての家族づきあいとなった。先生のマダガスカル生活の長さ深さには及ぶべくもないが、私も家族と共に10年程アンタナナリブに暮らし、独身・単身時代を含めると16年のマダガスカル滞在となった。先生・奥様と私・妻子の場合、ともにマダガスカルに生活基盤があることがお付き合いを深化させたのかもしれない。

先生と奥様がアンタナナリブにお出でになるたびにざっかけないレストランや拙宅でよもやま話を繰り返した。私の家族が日本（京都）に戻ってからはお二人で京都にお出でになるたびに連絡をいただき、先生ご夫妻と私の妻（もしくは妻と子）の3～4人で何度も食事に出かけたようだ。

先生はお酒を全く飲まないのに酔っ払い（の私）とお話しすることが全く苦でないようだった。マダガスカルの諸々を中心とした先生の話はあちこちに飛び、気分は私がまだ行ったことのないマダガスカル各地の旅行を楽しむというようなものだった。

マジンガの先生宅にもお邪魔した。昼間、マジンガ市街の遺構やサカラバ族の居住地を貴重な知見を交えて案内していただき、夜は屋台街で焼き肉小串とビールをたらふくいただいた。

初めてお会いしてほどない頃、マダガスカル在留邦人向けの深澤先生の文化講演会が開催され参加した。マダガスカル料理に関する講演であった。マダガスカルの代表的な料理を取り上げ、その調理法からマダガスカル語の語彙にまで話が広がる大変面白い講演であった。

この講演に魅了され、その後は先生がマダガスカルに来られるたびにアンタナナリブの拙宅で文化講演会をやっていただいた。協力隊やその他の在留邦人でいつも一杯であった。マダガスカルに住む者にとって先生の様々なお話はどれも興味の尽きないものばかりであった。講演会後の拙宅での軽いパーティやレストランでの食事会でも先生はいろいろな方々につかまつてはマダガスカルについての知見やアドバイスを惜しむことなく与えておられた。

先生を通して大変多くの方々の知遇を得たこともとても貴重なことだった。研究者の方々に限らず、先生にアドバイスを求めたり何かとコンタクトされる方が大変多くいたようで、そうした方々にも先生は惜しみなくアドバイスされていたようだ。まさにマダガスカル案内人、マダガスカルに関する邦人の総元締めといった感があった。

先生ご逝去の報に接して以降、何かとてつもなく大事なものを失った感じに捉われ続けている。

先生のご厚誼・友情に深く感謝し、心よりご冥福をお祈りします。

追悼：深澤秀夫先生

深澤秀夫さんを想う

川又由行（理学博士）

深澤秀夫さんと最初にお会いしたのは、1995年の2月頃、日本国大使館の手狭な1階の小さい待合室であった。当時の大使館は、アンタナナリボ Antananarivo の中心地イスラカ Isoraka にあり、伝統的な赤煉瓦作りの小さな家屋であった。私は JICA 専門家として派遣されて間もない時期であり、事前にマダガスカルの自然や政治経済の状況は勉強していたものの、マダガスカルの文化風習などの人文科学をよく理解していない時期であった。どの国に派遣されても同じだが、その国で仕事を行うということは、人を通じて物事を進めなければならず、マダガスカル独自のタブーの文化風習を身につけないと、仕事を共に行うことはできないと考えていた。大使館から文部科学省科学研究費（科研費）で文化人類学者の一行がお越しになることは伺っていたので、手っ取り早く拝聴したいと考えていた。と言うのも、私は学生の折に自然科学とは別に、文化人類学の授業も学んでいた。深澤さんにお会いして、その先生の名前をお伝えしたところ、深澤さんもご存じで、それ以降、親しくお付き合いさせて頂いたことを昨日のように思い出す。

そもそも私は1990年代初頭に、マダガスカルに赴任しないかと元官僚から要請があったが、当時在籍していたクイーンズランド大 (the University of Queensland) の関係者に承諾を得なければならず、その中の生物科学部 (Biological Science) で教授をされた橋川次郎先生（国際鳥類学会名誉会長）に相談した。当時マダガスカルで鳥類の研究をされていた大阪市立大（現、大阪公立大）の山岸哲先生（日本鳥学会会長）を紹介された。そして「マダガスカル自然紀行（山岸哲：中公新書）」を参考に学ばせて頂いた。この両先生が旧知の仲であり、私の恩師も日本植物学会会長で、両先生をご存じであったことから、マダガスカルの自然状況に関する知識を理解する機会に恵まれた。一般知識として、生物学を学んでいれば、マダガスカルは固有種が80%を超える唯一無二の国であることは誰でも知っていたが、加えて、文化社会人類学の知識も得たいと思った。

ここで深澤さんとの思い出を2-3紹介しよう。前述の通り、1995-1996年頃にかけて科研費の調査の際に、深澤さんからのお誘いを受けマダガスカル南東部の調査に同行したことがあった。他の同行者は森山工さん、内堀基光さん、飯田卓さんであり、調査地はマダガスカル南東部のマナカラ Manakara であった。アンタナナリボからアンチラベ Antsirabe、ラヌファマラ Ranomafana にかけての中央高地から一路東部の沿岸に向けてレンタカーを走らせ、標高が下がるにつれて徐々に湿気を増すと同時に、旅人の木 *Ravenala* spp. が多く植生し、我々を迎えていたようでもあった。

ここでフィールド調査を行いマナカラ Manakara からフィアナランツア Fianarantsoa の近くにかけて我ら一行は鉄道に乗車したことを思い出す。どの駅か忘れたが比較的大きな駅で停車中に駅付近に多くの露天商が商いをしていたが、深澤さんがお世辞にも美味しいとは思えない食べ物を口に運び試食を楽しんでいた。さすがに腹痛になるのではないかと心配したが、食べ物を通してメモ、スケッチを取ったり、写真を撮ったりされていた。私の専門（植物生態生理学）の物言わぬ植物と異なり、人

間を相手となると、言語学はもちろんであるが、風俗、習慣、伝説、禁忌などの民俗学に基づく人文社会の哲学を学ばせて頂いた。

このフィアナランツァとマナカラを結ぶ鉄道は植民地時代に建設されたが、メンテナンスなどを行なった形跡もなく、古い車体と線路は大きく傷つき、当然減速しなければ脱線することは目に見えていた。遠くの線路を見ると蛇行したり、線路間の隙間も大きく、大きな音を立てて鉄道列車が運行されていた。時折、乗車員が線路の状態を確認しながら進むため、いつ到着するかも分からぬ。場合によっては、途中で運行停止になり、後続の応援車両を夜通し待ちながら目的地まで運行する場合もあると言う。いわばこの列車は運任せの鉄道でもあったのだが、車内は活気あふれる老若男女の行商人で溢れていた。皆、持ち物は大きく、途中で列車が減速すると、沿線住民が待ってましたとばかりに乗車と下車を繰り返していたが、運賃を支払った様子はうかがえない。この大らかさが地域経済に欠かせない足になっているのは事実だ。私はマダガスカルで鉄道乗車するのは初めてであったが、深澤さんが乗客とも会話を交わしながらの道中では、とても刺激的な考現学を力強く学んだ。

深澤さんの研究フィールドは、マダガスカル西部のマハジャンガ Mahajanga であったが、私の赴任中に深澤さんが、足を骨折したとの一報が大使館よりあった。確か、タクシープルースで下車する折に、スリッパが何かに引っかかり、タイミング悪く骨折したと記憶している。すでに深澤さんは、マハジャンガの病院において、ボルトによる接合骨折手術を済ませており、その後にマハジャンガからタクシープルースを乗り継いで、タナの病院に入院することになった。私は早速病院に見舞いに行くと、現地の病院での手術で後遺症や感染症になるのではないかと心配したのだが、本人は至って元気で、あっけらかんとしていた。そして、東京に居る両親への連絡を依頼された。深澤さん曰く、「こうした機会でないと、両親はマダガスカルに来ることはない。是非、私の見舞いも兼ねて招きたい」と伝えて欲しいとのことであった。当時は、携帯電話もなく、日本時間の夜にご両親に電話をお掛けして、事情を伝えた。後日ご両親にも伺ったのだが、寝ぼけて電話を受けとったため、状況を深く理解していなかった。が、かえってそれが良かったと、述べられていた。今回の訪問で、親子の間でマダガスカルと言う話題を共有することができたことは良い機会であったと喜んでいた。

深澤さんはご存知の通りの博学で情報通でもあった。どの地域に日本人が住んでいたのか、日本企業の地域別プロジェクトだけではなく、誰がどのような調査・研究していたかなどを年代別に把握されていた。このようにマダガスカルの文化社会について多くの知識を得たのだが、私はこの広い知識を広く日本人会にも知っていただきたいと、大使館に掛け合い深澤さんに講演会をお願いした次第だ。それ以来、毎年大使館で講演会を開催していただいた。マダガスカルには世界でも稀な動植物が生息しているが、それぞれの地域で民族や文化風習も異なることなども伝えて頂いた。まさに生き字引きのような人であった。

1990年代後半に山岸先生は、マダガスカルで日本人研究者が、それぞれの分野で研究を実施していたものの、マダガスカルに興味を抱いている人も含めて、横の連携があればもっと素晴らしい活動に繋げができるのではないかと話され、情報交換の構築に務めたいと考えていた。そして、マダガスカル研究懇談会なるものを設立したいが、私に手伝ってくれないかとの話があった。その中でも絶対に加わっていただきたい方として、深澤秀夫さんと森山工さんのご指名があった。その背景には、この二人の文化社会人類学の知識と叡智が、どの分野を研究するにしても、各分野を繋げる接着剤の役割を果たすためである、と述べられていた。そして本研究懇談会が発足され、深澤さんはこの役割

を十分に果たされ、天国に旅立ってしまった。

深澤さんの訃報の第一報は、翌日、大豊建設の原田新二さんからのメールで知った。はつきり言えば、本研究会は深澤さんが切り盛りをしたと言っても過言ではない。今考えると、山岸先生もそれを見越していたと思う。特に、文章の査読においては他の追随を許さなかった。例えば、私が投稿原稿の中で、確証を持てない曖昧な文章表現をすると、必ず指摘された。これほどまでに情熱を持って査読を行う方も珍しかったが、その背景にはマダガスカルの文化社会への他の追随を許さない絶対的自信があった。深澤さんとの文章のやり取りを通して、ある意味で親交を探究できたことは非常に有意義であった。今、深澤さんがセラセラに投稿された文章を再読しているが、これほど特異な感覚を研ぎ澄ませてマダガスカルを考察した人は他にない。非凡な文章能力を発揮した方であった。

奇しくも、マダガスカルで桜の植林を行なっていた石原晃さんが2020年3月に、そして深澤さんが、2023年11月に、ともにマダガスカルから帰国後にまもなく他界された。思い出せば、深澤さんから何ページでもよいからと石原さんの追悼文の依頼があったが、今回このような形で深澤さんの追悼文を記すとは夢にも思ってもいなかった。早すぎる。本当に辛く残念無念であるが、深澤さんとの思い出に報いるためにも、私は微力ながらも今後のマダガスカル研究懇談会の繁栄を祈り全力で尽力したい。

最後に深澤さんが監修された、「マダガスカルのことわざいろいろ 22 (セラセラ 40 号)」の中で、「Maro ihany ny hazo fa ny fary no mamy」を紹介したい。深澤さんの直訳は、「植物にはたくさんの木がありますが、甘い植物はサトウキビしかありません。」、意訳では、「世の中に男性や女性がたくさんいても、その中で自分にとって大事な人は一人だけなのです」と言う。深澤さんは、「この諺は、マダガスカルの諺の中でも、警句や教訓が多い中で、(中略) いわば告白を述べる点は、いささか奇異な感じもするかも知れない。」と感想を述べた。これは「マダガスカルに多くの研究者が集うが、一つの国の研究の場において自然科学や人文科学の分野を網羅する本研究会のような会は他にない。」の意訳と私は考えている。まさに生物多様性の国、マダガスカルだからこそ成せる技であり、今後も皆様とともに、本研究懇談会を大切に守って育てることが、深澤秀夫さんの追悼に繋がると考えている。

マダガスカル研究懇談会会則

1999年	4月	3日制定
2002年	3月	30日改訂
2005年	4月	2日改訂
2008年	3月	29日改訂
2009年	3月	28日改訂
2016年	5月	1日改訂
2019年	3月	30日改訂
2021年	3月	27日改訂

第一章 総則

(名称)

第1条 本会はマダガスカル研究懇談会（英名：Japan Society for Madagascar Studies、マダガスカル名：Fikambanana Japoney ho an'ny Fikarohana ny momba an'i Madagasikara Madagasikara）と称する。

(目的)

第2条 本会は、マダガスカル島及びその周辺島嶼の自然・社会・文化に関する会員相互の情報交換及び交流を促進し、もってこれらに関する研究の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一 懇談会大会の開催

二 電子版による情報の発信

三 前二号に掲げる事業のほか、前条の目的を達成するために必要な事業

第二章 会員

(入会)

第4条 本会に入会しようとする者は、本会が別に定める方法により、入会を申し込むものとする。

(会員の権利)

第5条 会員は次の権利を有する。

一 第14条の総会への出席

二 第3条第二号の電子版情報への投稿

三 本会の事業活動への参画

(会費)

第6条 本会の会費は、無料とする。

(退会等)

第7条 本会を退会しようとする者は、事務局（第13条に規定する事務局をいう）に対して退会を申し出るものとする。

2 世話役代表（第9条第一号の世話役代表をいう）は、世話役会の決議を経て、次の各号に掲げる会員を強制的に退会させることができる。

一 第2条に規定する本会の目的に著しく反する行為を行った会員

二 本会の活動を妨げる行為を行った会員

三 本会の品位を損なう等の言動又は行為を行った会員

第三章 役員及び事務局

(役員)

第8条 本会に次の役員を置く

一 世話役代表 1名

二 世話役 10名以下

三 会計監事 2名

(役員の任務)

第9条 世話役代表は本会を代表し、会務を総括する。

2 世話役は、本会の庶務、会計、渉外、及び第3条各号に掲げる事業の運営を担当する。

3 会計監事は、本会の財産の状況を監査し、その結果を総会に報告する。

(役員の選任)

第10条 役員は、会員のうちから総会で選任する。

2 世話役代表及び会計監事は、役員の互選によってこれを選任する。

(役員の任期)

第11条 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、世話役代表の任期は連続2期を限度とする。

(世話役会)

第12条 世話役会は、世話役をもって構成し、世話役代表がこれを招集する。

2 世話役会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算案及び事業報告案

二 収支予算案及び事業計画案

三 会則の制定、変更又は廃止に関する案

四 役員の任期満了等に伴う次期役員候補の選出

五 前各号に掲げるもののほか、本会の運営に関する重要な事項として世話役会が総会に上程することとした事項

六 本会の運営の実務に関する細則の制定、変更又は廃止

七 事務局（第13条に規定する事務局をいう）の場所の選定及び事務局員第13条第2項に規定する事務局員をいう）の選任

八 前二号に掲げるもののほか、本会の運営に関する事項であって、総会の決議を要さない事項

3 世話役会の議事は、出席した世話役の過半数で決する。

4 世話役代表は、第2項に掲げる事項の全部又は一部を決議する必要があり、第1項の世話役会を招集することが困難である場合には、世話役全員に宛てた電子メールその他の通信手段を利用して世話役全員による協議を行い、その過程において世話役全員の過半数が同意の意思表示をした案をもって、当該事項を決定することができる。

5 前項の決定があったときは、当該事項についての提案を可決する旨の世話役会の決議があつたものとみなす。

(事務局)

第13条 本会に、世話役代表及び世話役の会務を補佐する機関として事務局を置き、その場所は、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを定める。その場所を変更する場合も同様とする。

2 事務局に事務局員を置き、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを任命する。

3 世話役代表は、第15条第2項の規定により第3条第一号の懇談会大会その他の催事の開催にあたり参加費を徴収することとし、かつ前項の事務局員が当該催事に参加する場合には、世話役会の決議を経て、その参加費を免除することができる。

第四章 総会

(総会)

第14条 総会は、会員をもって構成し、毎年1回、新会計年度開始以後4か月以内に、世話役代表がこれを招集する。

2 総会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算及び事業報告

二 収支予算及び事業計画

三 会則の制定、変更又は廃止

四 役員の選任

五 その他本会の運営に関する重要な事項として世話役会が上程した事項

3 総会の議事は、出席会員の過半数で決する。

第五章 会計

(経費)

第15条 本会の経費は、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。

2 本会は、第3条第一号の懇談会大会又はその他の催事を開催するにあたっては、その都度、世話役会の決議を経て、参加者から参加費を徴収することができる。ただし、第14条に規定する総会のみに出席する会員からは参加費を徴収しない。

3 前項の規定により参加費を徴収する場合には、世話役代表は、当該催事の開催及び参加費の額を予め会員に通知するものとする。

4 本会は、第3条各号に掲げる事業の実施にあたり、寄付金を募ることができる。

(会計年度)

第16条 本会の会計年度は、毎年1月1日からその年の12月31日までとする。

附則 (2019年3月30日)

この会則は2020年1月1日から効力を発する。

附則 (2021年3月27日)

この会則は2021年3月27日から効力を発する。

第 29 回懇談会(大会)のご案内

マダガスカル研究懇談会第 29 回大会は以下の要領で実施します。

今回は初となる神奈川県逗子市での開催です。昨年に引き続き、対面とオンライン配信を併用するハイブリッド形式で行います。対面開催では、講演会や総会はもちろん、その後の懇親会にもご参加いただけます。オンラインでは、遠方の方も講演会と総会に参加することができます。大会参加費は対面参加 1,000 円、オンライン参加無料を予定しています。

会員、非会員を問わず、ふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。

日時:2026 年 3 月 28 日(土) 13 時 30 分～(開場 13 時 00 分)

対面開催の場所:逗子文化プラザ 市民交流センター

〒249-8686 神奈川県逗子市逗子 5-2-16

URL: <https://www.city.zushi.kanagawa.jp/kouryu/>

会場等の問い合わせ先:マダガスカル研究懇談会事務局:info@madacom.org

※対面参加の場合は、事前登録は不要です。

オンライン開催の場所:

Zoom の URL を共有するために事前の参加申し込みが必要となります。懇談会ウェブサイトにオンライン参加の申し込みフォームを設定しますので、そちらからお申し込みください。懇親会には参加できません。

プログラム:

13:30～ ご挨拶

13:40～ 発表 1:藍澤光晴(流通経済大学)

「マダガスカルにおけるカラナの経済活動とその歴史
—十二イマームシーア派コーチャを事例として—」

14:50～ 発表 2:中村雅彦(元上越教育大学)

「私のマダガスカル特産オオハシモズ類の研究歴」

16:00～ 総会

17:00～ ポスター発表(会場:逗子文化プラザ 市民交流センター)

17:30～ 懇親会 (お弁当カフェ ICHI(予定))

大会参加費:対面参加 1,000 円、オンライン参加無料(予定)

懇親会参加費: 3,500 円(予定)

ポスター発表：

会場ではポスター発表会も開催します。A0 縦長の大きさ(縦 119cm、横幅 84cm)程度のスペースを割り当てますので、発表者ご自身でレイアウトと掲示および発表終了後の撤収をしてくださるようお願いします。なお、ポスター発表は、会員の方に限らせていただきます。

発表を希望される方は、2月末日までに、ポスター発表をする旨のメールを以下の 2 つのメールアドレスまで送り、発表者名とタイトルをお知らせください。

info@madacom.org

edit@madacom.org

申し込み多数の場合には先着順で発表をお受けしたいと思いますのでご了承ください。会員のみなさまの積極的なご応募をお待ちしております。

原稿を募集しています

SERASERA は、会員間の交流と情報交換を目的としたニュースレターです。広く会員各位からの原稿（文章／表紙写真）を募集しています。

- ◆ SERASERA は、2020 年 2 月発行の 42 号から、紙媒体の印刷物ではなく、マダガスカル研究懇談会のホームページ (<http://www.madacom.org/news/index.html>) 上で電子的に公開されています。SERASERA への投稿・寄稿をめぐるご質問等については、電子メールで編集部宛て (edit@madacom.org) にお問い合わせください。

1. 原稿期限

毎年、原則 5 月 1 日に夏号の編集を、11 月 1 日に冬号の編集を開始します。この日までに、電子メールで編集部まで原稿をお寄せください (edit@madacom.org)。ただし、文章を書きなれていない方の場合には、編集部とのあいだで通常より多くのやりとりをする場合がありますので、上記の期日よりも早めに原稿をお寄せください。

2. 原稿形式

文章原稿はマイクロソフト社のワード形式で、写真原稿は JPG 形式でお寄せください。

3. 写真原稿

表紙写真には、撮影者、撮影場所、撮影年（月日）および 100～300 文字の解説文章を添えてください。

4. 編集の手間を軽減するため、表紙写真原稿ではない一般原稿の場合には、できる限り、投稿者自身が文章原稿に写真を貼りこんで整形したワードファイルを作成し、お送りください。

5. 文章原稿

分量にとくに制限はありませんが、ひとつの記事の長さは、短いもので 2000 文字ていどを目安とします。掲載希望コーナーの名まえと題名、執筆者名と所属をお忘れなく。

文章は、予備知識のない人にも内容と意図が理解できるよう、できるかぎりやさしくわかりやすい表現で書いてください。マダガスカル語の語彙や地名、人名をカタカナ表記される場合には、アルファベット表記も添えてください。アルファベット表記がわからない場合は、編集部にご相談ください。生物についての学術的な原稿の場合は、生物名のラテン学名もできるだけ添えてください。

6. 関連写真・図表

番号と短いタイトル、必要に応じて 2～3 行以下の解説を付してください。ひとつの記事につき、写真と図表あわせて 10 点ていどを上限とします。

7. 記事の出典（リソース）

自分が直接見聞していない話や、自分が集めたのではない資料については、出典（リソース）を明記してください。また、未確立の学説や根拠薄弱な仮説などが引き合いに出される場合、編集部が根拠や出典などの提示を求めることがあります。引用した文献については、著者名・文献名・出版年・出版社ないし書誌名・掲載ページ（雑誌論文の場合）などを文献リストとして末尾にま

とめておいてください。

8. 文章コメント

わかりやすさと最低限の正確さを期するため、編集部が文章に目をとおして、著者にコメントを連絡いたします。ただし、最終的な文責は寄稿者にありますので、編集部からのコメントに従うか従わないかを適宜判断して、手直しをおこなってください。この作業は、原則一回とします。SERASERA の発行主旨や会の活動目的に合致しない記事と編集部が判断した場合には、掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

9. レイアウトの著者校正

夏号の原稿については6月中、冬号の原稿については12月中に、レイアウトの著者校正をおこないます。この時点では、ページ数が変わるような大幅な変更ができませんので、8. に関する手直し時までに、納得のいく文章にしあげてください。著者校正の段階で大幅な加筆訂正をされた場合には、編集部が掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

10. 刊行とウェブ公開

夏号は7月下旬、冬号は1月下旬をめどに電子的に刊行いたします。ただし、編集作業は会員のボランティア作業にもとづいておこなわれていますので、執筆者のみなさまにはその旨よろしくご理解とご協力のほどをお願いいたします。投稿された記事や画像は、マダガスカル研究懇談会のホームページで公開します。

ニュースレター編集方針

- ・ マダガスカル研究懇談会ニュースレターは愛称を「SERASERA」とします。Serasera はマダガスカル語で「交流」を意味し、<セラセーラ>と発音します。
- ・ ニュースレターの編集は、世話役と事務局員から構成される編集部によりおこなわれます。
- ・ 編集部員の名前はニュースレター上に開示します。
- ・ ニュースレターは会員からの投稿および編集部が会員と非会員に対し執筆を依頼した原稿を記載し、発行されます。
- ・ 原稿は、会の活動目的に沿う内容とします。
- ・ その上で原稿は、その分野や領域を限定しません。
- ・ 編集部は寄せられた全ての原稿を査読し、その内容が会の活動目的に合致しているかどうか、事実関係についての誤りあるいは文章表現や表記上の誤りや不適切な箇所がないかどうかについて判断いたします。
- ・ 編集部は、執筆者に対し、原稿内容の修正を求めることができます。
- ・ 原稿のニュースレター掲載への最終的判断は、編集部に一任されます。したがって、その内容が不適切であったり、事実関係の修正がなされない場合には、編集部から依頼した原稿であっても、不採用とする場合があります。不採用の理由については、原稿の執筆者に対し編集部から通知いたします。
- ・ SERASERA に掲載された著作物の著作権はすべて著作者にあり、著作者は SERASERA に掲載された著作物を自由に利用できることとします。ただし著作者は、著作物の複製と公衆送信をマダガスカル研究懇談会に許諾したものとみなします。

2025 年度世話役・事務局・編集部・会計監事

【世話役】飯田卓・市野進一郎・蟹江康光・蟹江由紀・佐藤宏樹・高畠由紀夫・水田拓(世話役代表)
・箕浦信勝・森哲・吉田彰

【事務局】蒲生康重・篠村茉璃央・前畠晃也・増田初希

【編集部】市野進一郎(編集主任)・大河龍之介・篠村茉璃央・前畠晃也・水田拓

【会計監事】杉本星子・平野智巳

マダガスカル研究懇談会 ニュースレター SERASERA 第 53 号

発行者 マダガスカル研究懇談会

〒606-8511

京都府京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学アフリカ地域研究資料センター内

2025 年 11 月 10 日発行